

スポーツにおける社会化の研究

順天堂大学大学院 修士課程

体育学研究科 体育学専攻

太田雅夫

論文指導教員

斉藤定雄 教授

合格年月日

1981年3月3日

論文審査委員

主査

高橋亮三

副査

教授 小沢

副査

南谷和利

目 次		ページ
序 章	—————	1
第 1 節	「遊戯」と「スポーツ」	1
第 2 節	「教育」と「スポーツ」	10
第 3 節	「余暇」と「スポーツ」	11
第 4 節	スポーツにおける	
	望まれど	13
第 1 章	社会化と価値 —————	15
第 1 節	社会化論の検討	15
第 2 節	価値論の検討	26
第 2 章	スポーツと社会化 —————	36
第 1 節	スポーツにおける	
	社会化研究	36
第 2 節	「スポーツへの社会化」	
	研究の枠組	40
第 3 節	先行研究でのスポーツに	
	おける価値	43

		ページ
第 3 章	本研究の目的と方法	47
第 1 節	本研究の目的	47
第 2 節	本研究の方法	48
第 4 章	調査結果と考察	50
第 1 節	水泳教室における調査から	50
第 2 節	小学校 5、6 年児童の調査から	85
第 5 章	スポーツにおける価値の分析	97
第 1 節	価値意識項目の設定	97
第 2 節	両親の価値意識分析	102
第 3 節	子どもの価値意識分析	126
第 4 節	スポーツにおける価値の類型	134
第 5 節	社会化プロセスと価値	142
第 6 節	個人スポーツとチームスポーツ の価値意識構造	145
第 6 章	結 論	148
第 7 章	要 約	157
	引用文献	162
	欧文要約	

## 序 章

人びとは、スポーツ活動に何を求めて参加しているのだろうか。スポーツは、遊びにその原初的形態を見い出すことができるが、現代においては、何か違った存在意義を持つように思われる。そして、この存在意義として捉えられるものが、人間の「生きがい」、  
「幸福」といった原問題なのである。

社会科学は、この人間の「生きがい」、  
「幸福」といった原問題を追究していく中で、多数の成果をおさめてきた。

ヒトは、有機的存在として生まれ、社会的存在としての人間となる過程の中で、自我と社会のコンフリクト<sup>註1)</sup>を越えて成長していく。この過程を「社会化」概念の中心的問題として捉え、本研究においては、何故、人びとがスポーツに参加するのか、という「スポーツへの社会化」プロセスを論究したい。

## 第1節 「遊戯」と「スポーツ」

人類の長い歴史において、絶えず創り出す

註1) コンフリクト(conflict)

れ、受けつがれてきた、丁まじまの文化は、  
 人びとの欲求充足と社会の統合という2つの  
 機能をもっていると考えられている。スポー  
 ツもまた、「遊戯」の領域から形式化され、  
 人びとの生活の一部となり独自の文化様式  
 を持つに至った。特に、近代においては、国  
 際的に一般化されたルールのもとに、多種多  
 様なスポーツを行ほう人びとも増加し、スポ  
 ーツ技術や施設用具の面にも進歩がみられる。  
 スポーツの源流を「遊戯」に求める時、従  
 来、J.ホイジンの「ホモ・ルーデンス」、  
 R.カイヨワの「遊びと人間」が注目されてき  
 ている。彼らは、「遊戯」としての「プレイ」  
 を、文化と社会の関連で述べている。

J.ホイジンは、文化現象としての遊戯の  
 本質を次のように述べている。<sup>12)</sup>

「遊戯」が生活全体の伴奏、補足には、た  
 り、時には生活の一部に与えられ、た  
 りすることがある。生活を飾り、生活  
 を補うのである。そして、その限りに

おいて、それは不可欠のものにして  
しまう。個人には、一つの生活機能と  
してなくしてはならないものにして、ま  
た社会にとつては、その中に含まれる  
ものの感じ方、それが表れす意味、そ  
の表現の価値、それが創り出す精神的  
社会的結合関係、こういうもののため  
に、かいつまんでいえば、文化機能と  
して不可欠にするのである。」

この J. ホイジン かの著述は、遊戯が日常生  
活から切り離して考えられる概念でありはが  
らも、結果的には文化として人間にとって必  
要とつて、いふ事実を示して、いふといえよう。  
スポーツもプレイの性格を持つものとして前  
提し、文化機能を持つことを考えるならば、  
彼の述べるように、それが生活の伴奏になっ  
たり、時には、生活の大部分を占めることさ  
えあるのかも知れない。それ程までに、スポ  
ーツ事象の中に我々が深く入りこんでしま  
うのは、ただ、スポーツが持つ文化機能だけを

原因としてとらえることは妥当ではまい。スポーツが文化である以上、文化それ自体の中心概念である価値の問題があげられる。この問題をさらに深く考察すると、そこには、人間を行為に導くものとしての価値が重要な位置を占めるものとしてあげられよう。

又、R.カイヨワは<sup>4)</sup> J.ホイジンガの研究を批判的に受けつぎながら、「遊び」を次のように定義している。<sup>註1)</sup>

- 1) 自由な活動
- 2) 隔離された活動
- 3) 未確定の活動
- 4) 非生産的活動
- 5) 規律のある活動
- 6) 虚構の活動

これら6つの特性は、遊びの形式的な側面にすぎないが、スポーツと文化を考える本節では、スポーツの性質(特性)をより明確なものにするために、重要な知見として捉えられる。

註1) R.カイヨワの遊びの定義については、詳しくは文献4)に引くことができる。

この遊びの定義を前提として、スポーツを  
考えてみると、いくつかの疑問点が残っている。  
それらは、この特性に疑問符をつけ加える  
ことから始まる。

1)果たして、スポーツは自由な活動であら  
うか、又、全く強制されてはいないだら  
うか。

2)スポーツは、完全に現実生活とは隔離さ  
れた場(空間)で行われているだらう  
か。

3)スポーツにおいて、その結果(勝敗や記  
録等)は、終了まで未確定であらうか。

4)スポーツは、個人の意識のレベルで、現  
実生活とは、切り離された虚構の世界で  
の現象であらうか。

これらの疑問は、もし、R.カイヨワの定義  
が、真理であり、かつ、プレイとスポーツが  
全く同じ性質のものであるならば、打ち消さ  
れるであらうか、はっきりと断定すること  
できない点から、「遊び」と「スポーツ」は



やはり何か違、た特性を持つことが考えられる。

さらにまた、R.カイヨワ<sup>5)</sup>は、「遊び」の分類を次の4つのカテゴリーで示している。

1) 競争 (Agôn, アゴン)

2) 運 (Alea, アレア)

3) 模倣 (Mimicry, ミミクリ)

4) 眩暈 (Ilinx, イリンクス)

そして、この分類とは別に、遊戯的要素パイディア (Paidia) と競技的要素ルドゥス (Ludus) を2つの極に位置づけ表1に示すように、遊びを分類している。

表1 遊びの分類 (R.Cailloisの表を多田道太郎が再作成)

	アゴン(Agôn) 競争	アレア(Alea) 運	ミミクリ(Mimicry) 模倣	イリンクス(Ilinx) 眩暈
パイディア (Paidia) 遊戯的要素 ↑	かけこ	じゃんけん ルーレット	子どもの物真似 仮面	メリ-ゴ-ランド ブランコ
↓ 競技的要素 (Ludus) ルドゥス	ホクシング スポーツ競技全般	くじ ポ-ルゲーム スポーツの試合	見世物全般 プロスポーツ	スキー 宅中ウ-カ-ス

表1に示す通り、スポーツは、どのカテゴリー  
 ーにおいても競技的要素であるルドゥス  
 の極に近いことがわかる。4つのカテゴリー  
 に分類はされているが、当然のことながら、  
 単一のカテゴリーだけに属するというわけが  
 はなく、複数のカテゴリーを伴って表される  
 場合が多いことも彼は指摘している<sup>5)</sup>。

R.カイヨワにしたがって、遊びとしてのス  
 ポーツを考えてきたわけであるが、ただ単に  
 「スポーツは遊びである」という命題を、現  
 代社会において成立させることは難しくな  
 っていると思われる。仮に、命題として成立さ  
 せることを考えるならば、「スポーツは、遊  
 びの要素を持っている」ということではな  
 だろうか。ここでも、J.ホイジンガと同様に、  
 スポーツの文化としての独自性、つまり、遊  
 びとは異なる意味においての特性は明らか  
 にしなければならない。

また、R.カイヨワは<sup>6)</sup>、J.ホイジンガの意見  
 をさらにすすめて、「遊び」が、社会性(社

社会機能)を持つことまで言及している。スポーツの社会機能としては、さまざまのことがあげられよう。例えば、スポーツをすることですキンシップがはかれ、人間関係が円滑になりとか、或いは、仕事の業間にスポーツをすることによって、気分転換になり、生産性を高めたりすることなどもあげられる。しかしながら、その機能の最も重要な面は、社会教育や、学校教育などの場面にもみられるのは明らかであり、その場面では、制度的にスポーツがとりあげられ、体育として重要な役割を演じている。文化的存在として、「遊び」とは、一線を画したスポーツの姿がそこにはあるといえよう。

スポーツが、遊びとは全く同じ特性のものとは考えられないことは前述したが、この論拠として、人びとが、スポーツに何んらかの望みしよを付与している点をあげたい。

「あの人は、遊び人だ」ということは、  
 「あの人は、スポーツマンだ」ということは

とは、大部ニユアンスがちがい、我々の文化圏においては、より望ましいのは後者の方である。「スポーツマン」ということは、一般的には、その概念の中に「スポーツをしてゐる人」という以外に、「体力のある人」「健康な人」「さっぱりとした性格を持つ人」「判断力のすぐれた人」等々、いろいろ望ましが付与されてゐる。そして我々は、おおよその共通理解がなされてゐるこれらの望ましい人間像を、常に求めてやまはしい。そこに、スポーツをすることの意味を感じるのである。そしてこの理想に近づくために、スポーツが、人びとに親しまれ、行はわれてきてゐるといふ、てよいであらう。これらの人間としての望ましさ、つまり、価値は、スポーツ活動に参加することによつて求められるのである。

その「良さ」を知つてゐる社会では、当然の帰結として、「教育」という場面に再現されてゐる。

## 第2節 「教育」と「スポーツ」

前川<sup>22)</sup>は、体育の目標を、発達の目標と生活的目標との相互的に関連における、人間の調和的發展に置いているが、これは、ただ単に体育にけの目標であるわけではいい。つまり、教育が、望ましい人間存在への働きかけであるならば、その一領域である体育は、スポーツを通して、望ましさを求めるものであろう。スポーツが内包する運動文化を伝達する体育は、究極的には、人間としての望ましさをスポーツが与え得るか否かの問題を持つものである。

そこに、スポーツの持つ教育的機能としての意義がある。

これを前提とすること、スポーツは、人間に対して、生理的に、心理的に、そして社会的に働きかけるといえよう。

E. デュルケイム<sup>8)</sup>が、「教育は、未成年者の体系的社会化である」と述べている。「社会化」は、まさに、人間の持つ望ましさを、獲

得してゆく過程としてとらえられ、この過程を精緻に分析していくことが、人間における教育作用を明らかにするばかりか、望ましまし人間存在を求めることにもつたがらである。

### 第3節 「余暇」と「スポーツ」

我々の歴史は、「自由」を求めての政治的・経済的・精神的抑圧からの解放への戦いである、たと言、ても過言ではなないだろう。そして国際的レベルにおいても、個人的レベルにおいても、「自由」は勝利をおさめてきている。E. フロムは、人間が自分自身の主人公となるための個性の最高の肯定である「自由」の意味を考えた。

自由な環境、自由な社会に存在し、生活を営んでいる人びとは、ほぼ労働時間、睡眠時間と同程度の時間を自由に扱おうとすることができる。ここに「余暇」の問題が生まれる。

人びとは、余暇において、自己充足のために、さまざまの活動によってエネルギーを消費すが、中でも、近年、余暇活動としてのスポ

一ツは、参加拡大の方向へ発展してきていてい  
 といっています。

<sup>32)</sup>  
 斎藤は、この余暇活動としてのスポーツが、  
 その活動を通して文化の担い手となることか  
 ら、人びとにとって「参加の喜びばかりでは  
 なく、ルールやマナーに導かれる、参加する  
 個人の主体的努力によって、倫理的、社会的  
 な行動基準や人間関係を調整する機能を持つ  
 と同時に、健康効果も期待できる」とし、「  
 個人の幸福への不可欠の活動として位置づけ  
 られる」と述べている。そして、これと同様に  
 に、スポーツが「生の充実」「生の実現」の  
 ためにあると考えている。

このことから、理解が深まるように、人び  
 とにとって、余暇としてのスポーツ参加が、  
 持つ意味は大きい。それは、生涯体育の観点  
 と社会教育の観点からみても重要であり、今  
 後、スポーツが、余暇において占める割合を  
 増加させる理由ともなるのである。いかに、  
 「参加の自由」を保障されている余暇活動で

あるとしても、スポーツが持つ望ましさを知  
 った人であれば「主体的参加」「積極的参加」  
 という行爲を、結果として導くであろう。

#### 第4節 スポーツにおける望ましさ

第1節から節ごとに述べてきたことは、序  
 章の冒頭で述べた文章に帰結する。人は何の  
 ために、何を求め、スポーツをするのか、つ  
 まり、なぜ、スポーツに参加するのか。この  
 問題こそが、体系的な理解を必要とするので  
 ある。従来「スポーツへの社会化」として概  
 念化されてきたプロセスは、「参加」に視点を  
 定めることで、より、明確なものとなる。

参加が行爲である以上、論理的には、目標  
 設定が行われ、この目標は、価値体系から演  
 繙される。つまり、スポーツにおける望まし  
 さとしての価値は、参加行爲を導くものとし  
 て規定できるのである。このスポーツにお  
 ける価値を考察することは、スポーツ参加を  
 促進させる方途を理解することにつけがら、  
 何を提供すれば、人がスポーツに主体的に、



積極的にコミットメントできるかが理解できる。そして、これは、動的な働きかけとしての価値の機能であり、この応用として、スポーツを指導する際の指針を導びくことも可能であるし、スポーツの次元における組織づくりの際に、主体的な個人の参加を導びく鍵となるであろう。

# 第1章 社会化と価値

## 第1節 社会化論の検討

### (1) 社会化の概念

「社会化」(Socialization)の概念は、人間に関わる諸科学、特に、教育学、社会学、そして心理学などにおいて、人間の成長発達を考える際のkey概念として捉えられている。古くは、E. テュルケイム<sup>8)</sup>の説明にみられるように、まさに、人間における教育作用を論ずる上で重要な位置を占めているのが社会化論であろう。

1954年にI. L. チャイルド<sup>9)</sup>は社会化を次のように定義している。

「社会化は、それまでひろい範囲の行動の可能性を持つて生まれた個体が、より狭い範囲に制限された現実的行動を発達させる方向へと導かれる過程全体をいう。何が習慣的なるものがあり、許されているかということの範囲は、この個人の属する集団の規準によって

ままることである。」

しかしながら、この定義においては、あくまでも社会化を、個人の集団規範への同調という面、つまり、受動的な立場における個人の発達として考えているにとどま、ている。社会化をこのように受動的な個人の発達プロセスと前提するならば、個人ひとりひとりが定められた社会的規準のみに同調するということになり、た社会化論の方向性を持つに至ると思われれる。彼の定義は、1969年に再び、彼自身によって、ある程度、個人の持つ積極性や自発性に役割を与え、次のように定義として再考されている。

「社会化とは、個人が他の人びととのあいだの相互影響 ( Transaction ) を通じて、社会的に重要な行動や経験についてのこの個人特有の型を発達させていく過程全体を示す、ひろい意味を含む用語である。」

ここでは、社会化を、個人が他者との相互

影響を通じて、個人特有の行動パターンを発達させる過程として捉えている。このように社会化論ではそのプロセスに文化的モデルを前提とし、モデルとのかかわりあいでの学習が行われる社会的学習 (Social learning) をそのメカニズムとして考える議論が支配的である。また、自分の持つ要求と環境との間にバランスのとれた状態があると考えられるならば、その学習は適応の過程として考えられることもある。

また、その社会における一般的に行動パターンを習得することは、個人が、それぞれの発達段階での適応についての課題、つまり、「発達課題」や「自己課題」を達成してゆく過程として考えられるのである。これは、社会化に、子どもが社会的に成長するプロセスであるばかりか、成人である、つまり、人間の一生にわたる発達過程を考えることが妥当とされるであろう。

次に、社会学者 F. エルキン<sup>9)</sup> の定義をみると

かつての社会学における社会化論が浮きぼりにされる。(1960年)

「ま、た、く、同、じ、個、人、が、2、人、と、い、つ、い、と、い、う、こ、と、。、そ、れ、ぞ、れ、の、個、人、は、異、な、た、遺、伝、的、条、件、や、特、有、の、経、験、を、も、ち、。、独、自、の、ハ、ー、ソ、ナ、リ、テ、イ、発、達、を、遂、げ、て、い、る、と、い、う、こ、と、は、い、う、ま、で、も、ほ、い、こ、と、で、あ、る、が、。、社、会、化、の、考、え、方、は、。、こ、う、し、た、個、別、的、な、行、動、の、型、や、過、程、に、は、関、心、を、も、た、な、い、。、そ、こ、で、と、り、あ、げ、ら、れ、る、の、は、。、文、化、や、社、会、に、つ、い、て、の、学、習、や、そ、れ、へ、の、順、応、に、お、け、ら、れ、る、個、人、の、間、の、類、似、性、と、。、発、達、の、そ、う、し、た、側、面、な、の、で、あ、る、。」

この定義にけられる「独自のハーソナリテイ発達」に注目したことは、社会化論に個性化という概念をとり入れたことで評価されるが、社会化論を、社会における個人の類似性に問うこと自体が、社会化をより固定的に考察してしまおうという危惧を抱くのである。

他方、心理学者 P. H. マッセン<sup>28)</sup>は、次のよう

に定義してゐる。(1967年)

「社会化とは、個人が自分のパーソナリティの特徴、動機、価値、意見、行動の基準、信念<sup>等</sup>とを習得して行く過程全体のことである。」

この定義では、社会化を個人のレベルで考えていることは明らかであるが、パーソナリティ内容として、動機、価値、意見、行動の基準、信念を、ただ並列的に考えている点は批判する。何故ならば、これらの内容の關係づけが<sup>い</sup>はかりか、余計に複雑な変数をもち、て社会化を述べようとする傾向に陥る可能性を<sup>持</sup>て<sup>し</sup>ま<sup>う</sup>のである。(著者は、人間のパーソナリティを行為に導びく、最も機能的な要因として価値をとらえてゐる。)

以上、社会学と心理学の分野から、社会論を検討してきた。次に、現代社会学の今日的イシュー<sup>註1)</sup>としての社会化論を論究したい。

## (2) 主体性への視点

「人間は、つくられるものであると同時に

註1) イシュー (issue)

みずから自己をつくるものである」という柴野<sup>34)</sup>の文章に象徴されるように、人間の社会化過程は、一面的に、捉えることは妥当ではな

い。従来、パーソナリティ形成とか人間形成と  
いうことばで呼ばれてきた社会的発達過程  
は、人間が、集団適応を習得し、成員性を獲  
得する過程であるが、社会化の全体像を明ら  
かにするためには、それのみならず、人間の  
能動的、または、自発的側面である、自己を  
つくる能力の獲得の過程、つまり、自己形成  
や主体性の獲得までに、枠組を拡げることが  
必要となる。

これまでの研究においては、人間の被形成  
的側面、あるいは、社会化される過程とその  
様態に焦点を置いてきたため、個人の主体  
的ないし自己形成的側面の把握は極めて不十分で  
あり、もっぱら同調という面から社会化を定  
義しているのがある。

社会化に対する従来のアパロキーは、大き

く次の三方向に分けることができる。その一つは、社会化を社会体系の機能的要件と考える。ソサエタリズムのアプローチであり、社会のメカニズムとしての社会化を考える立場と、第2には、人間の投企性に注目し、個人を社会に対する独立規定因として操作的に指定するインタビュー・デュ・アリスムとしての方法。そして、第3の折衷論的ないんたラクシヨニズムがある。これは、パーソナリティ形成の集団規則性と社会制度に対する個人の反作用を相互的にみようとすることである。前出のF.エルキンの定義はまさしくこの、第1のソサエタリズムに傾いていることは理解できよう。これは、理論社会学の分野での、構造-機能主義的な社会化説明として捉えられるが、ソサエタリズムは、人間を被形成的存在とみれば、ネガティブなパーソナリティ論に立脚しているため、社会化研究の枠組としては、柴野も指摘するのように、主体性欠如の社会化論を導びいてしまっていると思われる。



では、社会化論を再検討するにはどのような原則が導かれるのであろうか。

まず、先に述べた、第2の方法としての社会学的インディヴィデュアルリズムの立場にたつて、パーソナリティ論を展開することであらう。

社会化過程において、子どもが対象を概念的に理解する能力は、社会化代行者 (Agent) としての親、仲間、ほかから与えられるものであつて、発達段階に則した子どもの知能と認知装置の発達によつて獲得されるのである。これは、子どもを社会化されるものとして受動的にとらえるのであつて、社会規範や社会的価値の積極的加工者 (Active processor) とみられる観点への移行と考えられるのである。

つぎに、社会化研究は、個人と社会化代行者との関係を固定化し、そこでの相互作用や社会、文化的背景要因の考察に止とまらず、パーソナリティに対する社会化のインパクトとパーソナリティ内に形成された資質内容(

Content of socialization) の比較考量にも留意しなくてはならない。社会化を価値の内面化としてとらえた場合においても、やはり付け加えなければならない留意点ではあるが、価値の内面化は一律ではなく、結果としてのパーソナリティ形成は、個別化による多様となる。

また、社会化は、シンボリックコミュニケーション過程であるから、そのアウトプットとしての社会化内容の分析は、コミュニケーション媒体に対する個人(行為者)の主観的意味づけを考慮に入れなければならない。客観的には、どのような文脈において自律的パーソナリティ能力の獲得が可能になるかという視座から行われることになる。この点とも関連して、最後に社会化内容の獲得の前提となる。社会化文脈は、行為者の主観性と行為者と大きく生活空間の同時性に立脚したシンボリック相互作用であることに注目しなくてはならない。

24)

E. B. マクニールは、1969年に、社会化を

その要因から考え、次のように定義してゐる。  
「子どものもつ条件は、さまざまは行動  
の次元について、選択的な学習が行は  
れることで社会化される。この過程  
は社会化のエージェントや文化的力と  
のダイナミックな相互作用を通じて、  
それぞれの個人のもつ、個人的特徴の  
下で、おと好に於る諸条件について、  
どのような生活課題や行動のシステム  
が形成されるか、というかたちで進行  
する。」

この定義は、先に述べたE.L.チャイルドの  
後者の定義と非常に類似してゐるが、社会化  
の選択的学習 (selective learning) を、個人的特  
徴の制約のもとで、社会化のエージェントと  
の相互作用によつて進行される過程としてと  
らえてゐる点は、個性的な、社会化のプロセ  
スを明らかにしたものにした定義として評価す  
べきであらう。しかしながらこの定義におい  
ても、前述の主観主義的観点にたつた「社会

化」は、「選択的学習」ということばで表わされてはいるが、社会化過程における「主体性の獲得」は叫ばれていはいないのである。

以上のことをふまえた上で、社会化論を抽象的に生成していくと、第1には、ホジテイヴは社会論への移行、そして第2には、従来のソサエタリズムを捨象し、個別的なインテイクイテュアリズムへの移行、第3に、社会化の資質内容を、個人の主観的意味づけにのっとり分析していくことがあげられる。

これら3つの原則に立、た上で、社会化を考え、主体性に立脚した社会論を展開していかなくてはならないのである。

T. ハーソンス<sup>31)</sup>は、彼の一連の研究において社会体系 (social system) 論を構築した。

彼が人間の行を考へるとき、内在化してある価値の機能を、社会化の要件としていふことから、基調となつていふ概念が演繹され

「社会化は、価値の内面化の過程である」ということばができる。この短い定義によつて

考える時、内面化の概念には、主意主義的論議も含み得るし、ソサエタリズムに陥ることも多い。人間を「主体」として受けとめ、社会化によつて獲得された資質内容は、価値として捉えられ、有効な分析手順を与えてくれる。ここで、次節以下の価値論の検討が必要となるのである。

## 第2節 価値論の検討

前節では、社会化の概念を検討し、社会化を、価値の内面化の過程であると定義するに至った。本論文においては、社会化内容の説明変数としての獲得された価値の分析によつて、社会化を究明する以上、価値に附随する領域に言及しなければならぬ。

### (1) 価値の概念

見田<sup>25)</sup>は、C.クラックホーンの、価値の2つの定義に関して、両者における論理的矛盾点を指摘している。それは、C.クラックホーンの論文「価値と価値志向」における定義では、価値を「望ましきものに関する主体側の要因

としてとらえていゝのに対し、「パーソナリティの概念」においては、価値を「客体側の要因」としてとらえていゝ点がある。

見田は、価値に対して、独自の検討を加え価値を

「主体の欲求を満たす、客体の性能<sup>25)</sup>」と定義していゝ。

1) ここで「主体」とは、個人または、社会集団である。

2) 「欲求」とは、あらゆる分野において、あるものを望ましいとする傾向のすべてである。

3) 「客体」とは、価値判断<sup>註1)</sup>の対象となる一切のもののである。

4) 「性能」とは、属性、特性、能力、力、(あるいはそれらの程度)であり、価値を「望まれたもの」(the desired)、  
「望ましまもの」(the desirable)ではなく、むしろ「望まし丁」(desirability)であるとしていゝ。

註1) 価値判断については後述する。

事物は(客体は)、価値である (be) のではなく、価値がある (have) のである。「性能」であるからこそ、価値は、その本来の機能である「行為選択の基準」として役割を果たし得るのである。

次に、若干のその他の研究者における価値の定義を参考までに述べておこう。

1) R. リントン<sup>20)</sup> (1954年)  
 一連の状況に共通して存在し、個人の内面的反応をよび起こしうるすべての要素。

2) C. クラックホーン<sup>18)</sup> (1951年)  
 行為者にと、可能な、行為のさまざまなやり方、手段・目的の中から選択をするにあたり、その影響を与えるところの、そのまじきものに関して、個人あるいは集団が抱いている明示的あるいは暗黙の概念である。

3) マレーと C. クラックホーン<sup>17)</sup> (1953年)  
 ある特定の、客体あるいは客体の種類は、主体にと、多少とも持続的に、魅力的あるいは反発的のものでありうる。このように

場合、その客体は、正の価値、または正の力  
セクシス、すなわち、感動をよびおこして引  
きつける力、を獲得したとか、あるいは、負  
の価値、または負の力セクシス、すなわち、  
嫌悪をよびおこす力、を獲得したとか、われ  
われは言う。

#### 4) T. パーソングス<sup>31)</sup> (1951年)

一つの状況の中でも、行為者は本来、さま  
ざまな志向をとりうるが、その中でどれを選  
ぶかを決めるにあたり、標準はいし基準とし  
て役に立つような、共有シンボル体系の中の  
要素は価値とよばれる。

#### 5) 牧口常三郎<sup>23)</sup> (1931年)

価値とは人間が実在に対して吸引しあ、て  
いるか、またそれを、きら、て反感しあ、て  
いるかの関係状態である。

価値は評価主体と対象との関係概念である。

価値とは目的にたいする手段の関係にたっ  
て実在が(物質的でも精神的でも)その目的  
を達成せしむる力の総量をいう。



6) G. オルポ<sup>2)</sup>ート (1954年)

価値とは社会化された人間<sup>27)</sup>の側における共通の関心の対象である。

7) J. H. ミズラー<sup>27)</sup> (1958年)

望ましいという性質(満足をおぼえさせる性質)。

(2) 価値に関する諸概念<sup>25)</sup>

前述の「価値」の概念に関連する諸概念をここでおさえておきたい。

ある主体が、ある客体の価値を判断するという状況において、その主体が「価値主体」、その客体が「価値客体」、その判断が「価値判断」である。

個々の主体の、多くの客体に対する、明示的もしくは黙示的の価値判断の総体によつて、その主体の「価値意識」が構成される。また、逆に、個々の客体が、多くの主体によつて下される、明示的もしくは、黙示的の価値判断の総体によつて、その客体の「社会的価値」が構成される。

26)

(3) 価値の次元と類型

価値の次元はいし類型を論ずること、より、価値の分析が一般化される。

見田は、「価値の構造的次元と類型」を試みるうえで、2つの「<sup>註1)</sup>ホースペクティヴ」を考えた。

価値を「主体の欲求をみたす客体の性能」と定義する以上、価値類型の論理的出発点は、欲求の充足としてとらえることから始まる。しかしながら、欲求の充足が「快樂」であることを前提し、「快一苦」を唯一の価値基準としてとらえることは、2つのジレンマを生み出してしまふ。

第1に、「現在」の快が、「未来」の快であるとは限らばいことであり、第2に、「自己」にと、ての快が、「他者」にと、ての快であるとは限らばいことである。この2つのジレンマを克服するには、「時間的ホースペクティヴ」と「社会的ホースペクティヴ」とを提起するにいたる。

註1) ホースペクティヴ (perspective)

この価値判断の2つのパースペクティヴは、「今」をのりこえた「未来」へ、「自分」をのりこえた「社会」へと広がっていく。つまり、

1) 時間的パースペクティヴの中で

A; 「現在」の感情のほとぼしりままに身をまかせるべきか

B; 「未来」の諸結果にたいする顧慮から、それを抑制すべきか

2) 社会的パースペクティヴの中で

a; 「自己」の利害のおもむくままに行動すべきか

b; 「他者」への諸結果にたいする顧慮から、それを抑制すべきか  
したがって、

A; 「現在」中心主義、または、「感情」本位の生き方であり、「美」を究極価値とする観賞的側面が支配的となる

B; 「未来」中心主義、または、「理性」

本位の生き方であり、「真」を究極  
価値とする認識的側面が反配的とな  
る

a ; 「自己」中心主義においては、「幸  
福」を究極価値とする「欲求傾向」  
が反配的となる

b ; 「他者」中心主義においては、「善」  
を究極価値とする「規範意識」が反  
配的となる

ここから4つの、基本的な価値の類型が演  
繹される。すなわち、

1) 「自己」の欲求を「即時的」に充足  
させる性能

2) 「自己」の欲求を「長期的」に充足  
させる性能

3) 「他者」の「社会」の欲求を「  
即時的」に充足させる性能

4) 「他者」の「社会」の欲求を「  
長期的」に充足させる性能

ここで、

1) を「快」価値

2) を「利」価値

3) を「愛」価値

4) を「正」価値

と呼ぶことができ、これまで述べてきたことを総括すると、図1のようになる。

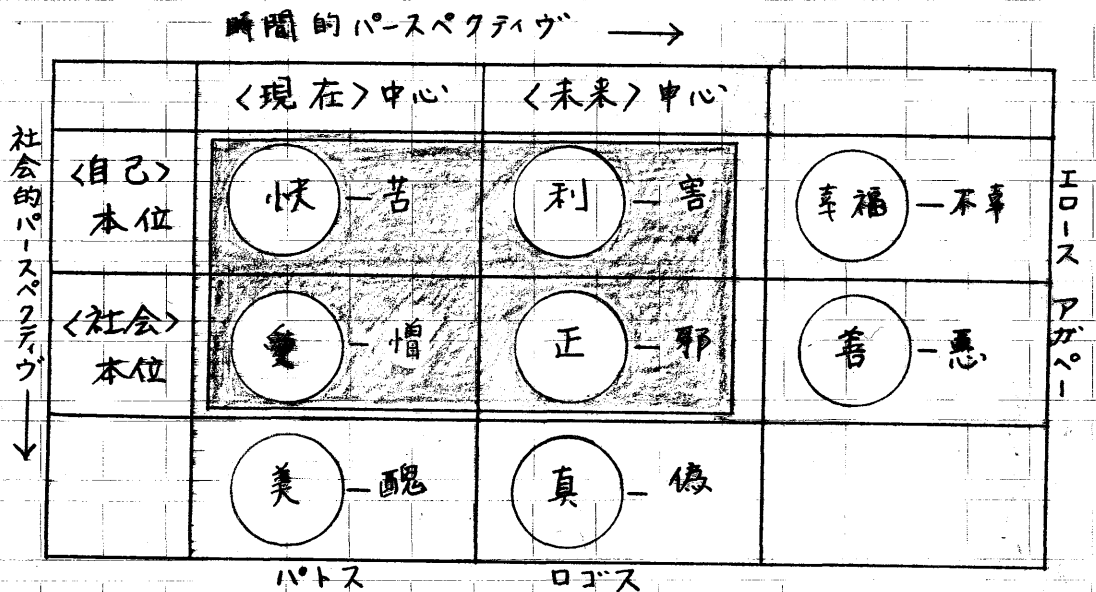


図1. 価値の種類 (見田宗介による1966)

本節を整理して見ると、「望まじき」の概

念である「価値」を分析するために、価値の  
構造的類型の図式を援用しつつ、「価値」の  
特性を明らかにする方途を考えてきたことに  
なる。価値分析の手段を考えるに、一般的に  
は、価値意識分析というフィルターを通してわ  
かるとはいえない。客体の属性としての価  
値は、主体内での判断を導く価値意識として  
同時成立性を持つと考えられ、分析方途とし  
ては、価値意識を通しての価値分析となる。

## 第 2 章 スポーツと社会化

## 第 1 節 スポーツにおける社会化研究

G.S. ケニヨン<sup>16)</sup>は、スポーツにおける社会化 ( Sport socialization ) を、

1) スポーツへの社会化 ( Socialization into sport )

2) スポーツによる社会化 ( Socialization via sport )

の 2 つに区別している。前者においては、スポーツに参加したり、好きに好んだりするのは、どのような社会的メカニズムにおいてかという点が問題になるのに対し、後者においては、スポーツによって、どのような人間がつけられ、集団、社会等にどのような影響をおよぼすか、という点が問題となっている。

また、藤原<sup>17)</sup>の研究では、スポーツと社会化の関連性を、スポーツマン的性格やスポーツマン的行動 ( G.S. ケニヨンの分類からいえば「スポーツによる社会化」の観点である。) にその論点を見い出していき。

本研究においては、「スポーツにおける社会化」研究の第一段階として「スポーツへの

「社会化」を精緻に分析することを目標として  
いる。

一連の「スポーツへの社会化」研究は、G.  
S. ケニヨンらの「スポーツへの社会化仮説」に  
基づいている。それは一誕生から成人に至る  
各ライフステージにおける、スポーツに関す  
る社会的状況（家族、学校、仲間、地域など）  
や、社会化エージェント（社会的状況内で、  
個人に積極的に働きかける機能をもつ人達、  
たとえば、両親、まよふたい、友人、親戚、  
教師など）の影響の度合いが相互連関して、  
人々のスポーツ関与の質と量が決められる一  
つというものであり、「スポーツへの社会化」  
を「ある特定のスポーツにおいて一定の役割  
を取得すること」<sup>16)</sup>と定義している。この点と  
も関連して、G.S. ケニヨン<sup>16)</sup>は、「スポーツへ  
の社会化」の研究領域として「スポーツ関与」  
(Sport involvement)の概念を提示している。  
「スポーツ関与」は、スポーツにおける役  
割を類型化したものであり、その形態から、



「一次的参加」( Primary involvement )と「二次的参加」( Secondary involvement )に分けられている。( 図 2 )

MODE	PRIMARY	SECONDARY				
		CONSUMER		PRODUCER		
		direct	indirect	leader	arbitrator	entrepreneur
ROLE	contestant	spectator	viewer	instructor	member of sports governing body	manufacturer
	athlete		listener	coach	rules committee	promoter
	player		reader	manager team leader	referee umpire scorekeeper other officials	wholesaler retailer

図 2. スポーツ参加の役割類型 (G.S. Kenyon 1968)

しかしながら、G.S. ケニョンの「スポーツへの社会化」の仮説は、前章で述べた社会化論からみても、明らかに、個人の主体性に立脚したものでなく、従来の社会化論としてのリサエタリズムに陥っているといえよう。この仮説には主体(スポーツ参加者)の主体的選択による意志の介在を要因としてとりあげていないばかりか、スポーツそのものが持つ特性に対する配慮が欠けている点は批判す

(13) (14)

る。この仮説に基づき一連の研究をみると、  
 そこには、次のような問題点が指摘される。  
 まず第1に、スポーツに参加したことが、  
 スポーツへの社会化が完了したことをとしてと  
 らえられていいる点である。この点は「スポー  
 ツ参加」の研究が、「スポーツへの社会化」  
 研究の、ただ一領域であるが、その全体では  
 ない、という点に帰結すると思われる。

第2に、「スポーツへの社会化」を「役割  
 取得」として前提、定義する以上、何をもっ  
 て役割取得とされるのか不明確ではいけない。  
 い。

このように、「スポーツへの社会化」研究  
 において、参加したことを、ア・マリオリに、  
 役割取得として前提する際には、論理的飛躍が  
 ある。

社会化論の立場から見て、リサエリズム  
 に陥っている仮説と、論理的に証明不可能な  
 定義にた、た、一連の「スポーツへの社会化」  
 研究は、「スポーツ参加」の研究としてほと

もかく、「スポーツへの社会化」研究としては十分なものであるとはいえはいい。

## 第2節 「スポーツへの社会化」研究の枠組

本研究では「社会化」自体への認識を深める必要性から、第1章において社会化論を検討してきた。その結果、社会化論の今日的イシューとして、主体性欠如のネガティブな社会化論から、より主体性に立脚した社会化論を展開する方向性を打ち出してきた。その原則としては、

1. 社会学的インディヴィデュアルリズムの立場にたって、ポジティブな社会化論を展開すること。

2. 社会化を価値の内面化と定義する限り、パーソナリティ内に形成された資質内容としての価値も考慮すること。

などがあげられた。この社会化論の文脈からみて、「主体」に目をむけた「スポーツへの社会化」を考えることが重要とすべき。そこで本研究では、「スポーツ参加」ということは

以上に限定的な「スポーツ参加 ( Sport participation ) 」ということに基づいて、より明確に、「主体」への視点を定める。なぜ自らすすんでスポーツに参加するのかという問題を考えるには、「行為主体」としての個人の選択がスポーツ参加を担う要因であると考える必要がある。

この「スポーツ参加」はまさしく、行為者がスポーツに“taking part in”する状態であり、スポーツ参加への主体的な個人の選択こそが、社会化論にとっても重要であり、この選択は、意識的行動における価値の機能として考えられる。

以上述べてきたことから、「スポーツへの社会化」を、本研究においては、「スポーツにおける価値(望ましさ)を、個人が内面化していく過程」としてとらえ、図3に示す、研究の全体的枠組を設定した。

子ども達は、特定のスポーツに参加することによって、スポーツに対する何んらかの評価をく

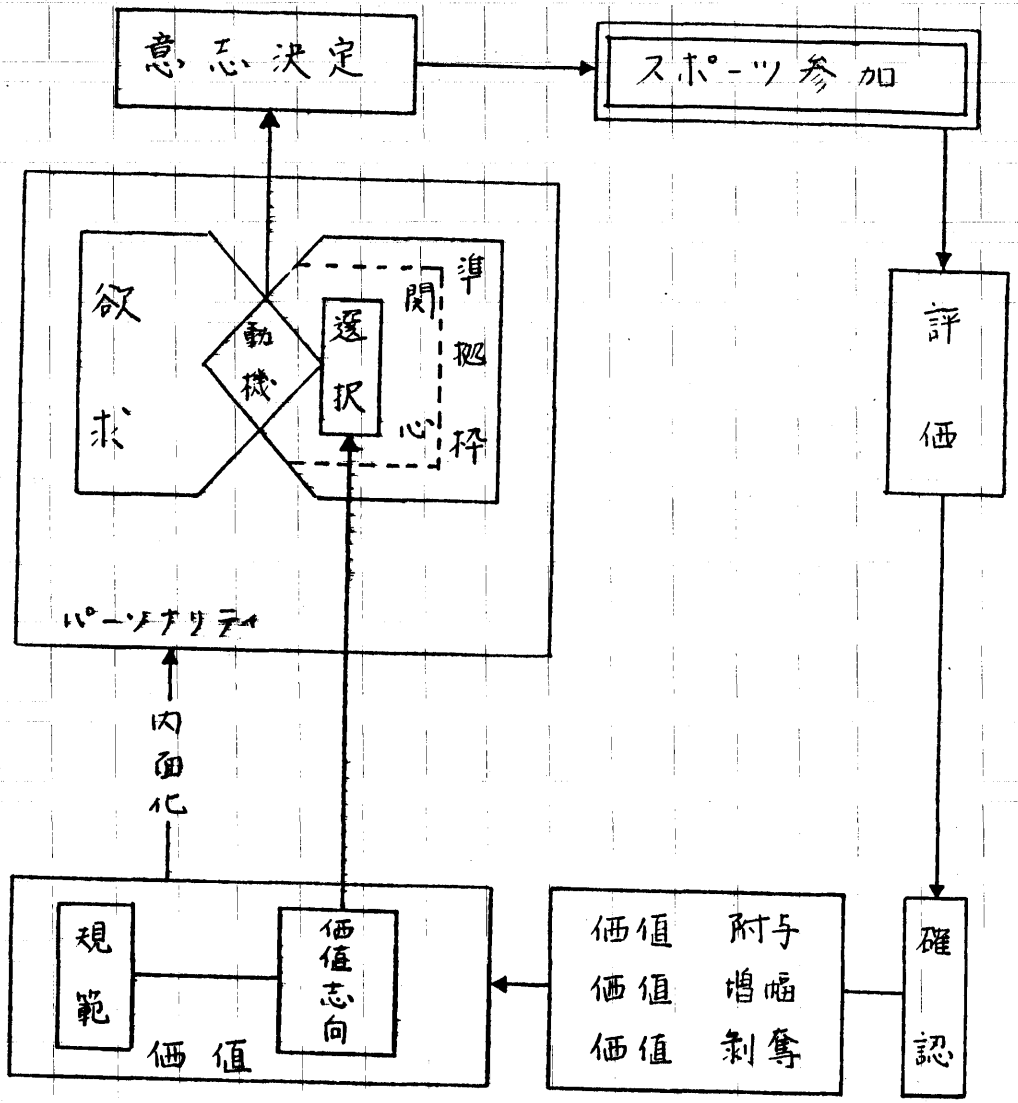


図 3. 研究の全体的枠組

だし、その評価に基づいて、価値付与をし、  
 その価値を内面化して価値意識を形成させて  
 いくのである。この価値意識は、価値に対応  
 する主体側の要因であり、準拠枠のベースと  
 なる。また、規範との関連から、価値志向に  
 よって、主体における選択をする際の枠とな  
 るのである。

図3に示す、全体的な枠組は、第1章の社  
 会化と価値を論理的に結びつけるものとして、  
 本研究では、重要な位置を占めている。

以上述べてきた枠組をもって、「スポーツ  
 への社会化」研究の分析視座とし、「主体的  
 参加」に基づく価値の内面化によるプロセス  
 -社会化-を考えていきたい。

第3節 先行研究でのスポーツにおける価値  
 序章では、スポーツにおける望ましいとし  
 ての価値をとりあげ、「遊戯」、「教育」、「余  
 暇」の領域にわたって、スポーツを考えてき  
 た。そして第1章においては、社会化と価値  
 の内面化と定義し、また、価値分析の基準を

述べてきた。本研究においては、第1章に示した基準に従い、社会化の資質内容としての価値分析を試みる。

ここで、「スポーツにおける価値」に関するいくつかの研究をとりあげておきたいと考える。本研究では、社会化と価値の関連はすでに示しているが、スポーツ社会学の分野では、両者を関連づけているものは数少ない。両者は、常に、別々の領域としてそれぞれ独立した問題として捉えられていいる。

上杉<sup>15)</sup>は、スポーツ価値意識論の必要性を、行序論と結びつけ、スポーツ行為者の価値選取過程にアプローチすることによって、スポーツ観が解明できると論じている。彼は、スポーツの価値を、見田の定義から、「個人または集団の欲求を満たすことと望ましいとされるスポーツの客観的屬性」とし、スポーツの価値は、スポーツの機能とは区別されるべきだと述べているが、序章で述べたように、本研究では、「人間存在」をスポーツが前提する

以上、「人間」にかかわる価値を「スポーツ  
における価値」の包括概念としてとらえてい  
る。

また、<sup>33)</sup>三本松は、スポーツ価値の類型化を  
試みている中で、スポーツの価値には、

1) 身体的側面…体力、健康の保持等

2) 社会的側面…社会性、人間形成等

3) 心理的側面…心理的解放、緊張等

これらの3側面があると述べている。

J.W.ベル<sup>3)</sup>は、古代ギリシヤから論じられて  
いる究極的価値、つまり、「真」「善」「美」  
をスポーツに適用し次のような従属的価値を  
特定している。

・真…知的判断の発達、知識、自己実現

・善…生理的フィットネス、健康、社会的  
市民性、リーダーシップ、スポーツ  
マニシップ、心理的フィットネス

・美…美的卓越性

また、<sup>19)</sup>L.A.ラルソンは、次の6つをスポー  
ツの価値として記述している。



1) 健康と体力

2) 有機体の能率的かつ効果的な活用能力

3) 有機体の発達ほうびに維持の知識

4) 人間の相互関係における社会的技術

5) 民主的な環境のもとでのリーダーシップ

70

6) 集団内における他者との協力

ファンデルツワール<sup>37)</sup>は、スポーツの価値を内容的側面から身体的価値、認識的価値、態度的価値に分類している。

これらの価値類型は、それ自体としては、意義あるものかも知れないが、本研究においては、先にも述べたように、スポーツにおける価値を見出す価値構造的類型に従って、調査結果からの分析をすすめていく。

### 第3章 本研究の目的と方法

#### 第1節 本研究の目的

前章までに、本研究の目的に関する項目は述べられてきているが、ここで再び、明確化を図りたい。

本研究の目的は、以下の2点である。

(1) 「スポーツへの社会化」のプロセスを、「スポーツ参加」を通して考えながら、「スポーツにおける価値の内面化」として定義する以上、主体側の要因として、社会化された資質内容としてのスポーツにおける価値を、価値意識をもって、類型する点と。(おとひ=子どもと母の規準、支持される価値=支持される価値の規準、個人スポーツ=チームスポーツの基準から)

(2) 他の社会化要因である、社会化のエージェント、さらに、生活環境要因との関連で、スポーツ活動実施を

独立変数とし、比較考察する。

## 第2節 本研究の方法

第1節で述べた目的に添って、本研究においては、理論的研究と調査研究の2つの方法があげられる。理論的研究はすでに述べてきたものであるから、ここでは調査研究の方法を中心に述べる。

### (1) 調査

調査は、2度にわたって実施された。両方とも、質問紙調査法(巻末に別添の調査票を用いた。)により行はわれた。

#### α) 順天堂大学水泳教室参加者調査

1980年7月29日から10日間に行われ、実施された順天堂大学水泳教室には、延べ830名の参加者があった。この参加者を対象母集団とし、5日間単位で行はわれた。前後期において、3日目に調査票を配布し持ち帰り自宅において記入する方法を用いた。(調査期日は、7月31日と8月5日の2回であった。)

調査票は、前後期合わせて、642名に<sup>註1)</sup>配布

註1) 1980年7月8月は大変天候が悪く、屋外プールのため、出席率が低かった。

回収数は564(87.9%)であり、内、有効回収数は471(73.4%)であった。

### b) 小学校5.6年児童に対する調査

1980年11月下旬に、集団記入法により、習志野市立屋敷小学校5.6年児童を対象に調査を行った。5.6年児童教389名中、欠席者を除く381名(97.9%)の有効回答を得た。

これは、ほぼ全数調査といってもよいであろう。

a, b両調査の項目は巻末別添の調査票を参照された。

尚、本研究の統計処理には、東京大学大型計算機センター M200-H VOS-3 を利用し、データ解析を行った。

## 第4章 調査結果と考察

## 第1節 水泳教室における調査から

## (1) 単純集計結果から

1) 基本的属性：水泳教室参加者調査において、被調査者の年齢分布は表2に示す通りであり、平均年齢は約8.5才であ、た

表2 年齢

	N	%
13才以上	3	0.2
12才	15	3.2
11才	45	9.6
10才	70	14.9
9才	87	18.5
8才	107	22.7
7才	85	18.0
6才	52	11.0
5才	6	1.3
4才	1	0.2
計	471	100.0

又、性別は表3に示す通り、男227名(48.2%)女244名(51.8%)であり、ほぼ男女同数の集団であることから、本調査では、

性差による回答の片寄りはないと思われる。

表3 性別

	N	%
男	227	48.2
女	244	51.8
計	471	100.0

学年別の分布は、表4に示す通りである。

表4 学年

	N	%
幼児1年	86	18.3
2年	102	21.7
3年	97	20.6
4年	85	18.0
5年	60	12.7
6年	38	8.3
中学	3	0.6
計	471	100.0

本人の出生順位は、表5に示すように、第1子、第2子で90%以上をしめている

表5 出生順位

	N	%
第1子	238	50.5
2	193	41.0
3	39	8.3
4	1	0.2
計	471	100.0

家族数をみると、表6のように4人家族が最も多く、259(55.0%)を示している。これは現代の核家族化とも一致し、本調査でも核家族の率が81.4%にもおよび、ている。(家族形態を家族構成員から別に判断した。)

表6 家族数

	N	%
3人	36	7.6
4	259	55.0
5	120	25.5
6	47	10.0
7	7	1.5
8	2	0.4
計	471	100.0

家族内男性数、および女性数は表7、表8  
に示す通りである。

表7 家族内男性数

	N	%
1人	106	22.5
2	195	41.4
3	135	28.7
4	31	6.6
5	4	0.8
計	471	100.0

表8 家族内女性数

	N	%
1人	102	21.6
2	198	42.1
3	139	29.5
4	29	6.2
5	2	0.4
6	1	0.2
計	471	100.0

住居及び、居住年数は、表9、表10に示す



通りであるが、住居は持家が非常に多く、70.9%の高率を示し、居住年数は8年以上のものが多い。ほぼ52%に達していた。

表9 住居

	N	%
持家	334	70.9
マンション	19	4.0
借家	36	7.6
団地	23	4.9
アパート	14	3.0
その他	44	9.6
計	471	100.0

表10 居住年数

	N	%
~1年	28	5.9
~2	23	4.9
~3	31	6.6
~4	33	7.0
~5	19	4.0
~6	26	5.5
~7	24	5.1
~8	34	7.2
8~	243	51.6
N.A.	10	2.2
計	471	100.0

各家庭の年収をみると、401万円から500万円と回答した者が最も多く、127(27.0%)次いで、301万円から400万円が、101(21.4%)と好っており。この年収分布は表11に示すように、比較的高収入の家庭が多いこともうかがえる。

表11 年収

	N	%
~200万	7	1.5
~300	35	7.4
~400	101	21.4
~500	127	27.0
~600	71	15.1
~700	46	9.8
700~	45	9.6
N.A.	39	8.2
計	471	100.0

2) 本人のスポーツ活動：表12に示すように、本人の学校以外でのスポーツクラブへの加入は、加入している者147名(31.2%)と好っており、非加入者の半数を下回る低率を

示した。

表12 学校外スポーツクラブ加入

	N	%
加入	147	31.2
非加入	324	68.8
計	471	100.0

種目としては、体操、水泳、野球、剣道、サッカーが多く、25%から8%の率であった。そのスポーツクラブにおける練習日数は、表13に示す通り週1日が最も多く、115(78.3%)とあり、述べている。週1回のスポーツクラブへの参加は、果たしてそれだけで運動量、スポーツ技術などの点に関して満足のもの意識されてくるのであろうか。<sup>註1)</sup>(表13)

表13 練習日数(週)

	N	%
週1日	115	78.3
2	25	17.0
3	3	2.0
4	3	2.0
5	1	0.7
計	147	100.0

註1) 屋敷小学校の調査では、運動量(81名/107名中、75.7%)時間(76名、69.7%)コーチング(88名、80.7%)施設・用具(83名、76.9%)に関して、70%から80%のものが満足しているという回答をしている。

次に、スポーツクラブでの指導者数（本人が指導を直接受けている指導者数）は1人と回答した者48名（32.7%）が最も多く、次いで、2人と回答した者45名（30.6%）であった。（表14）

表14 指導者数

	N	%
0	14	9.5
1	48	32.7
2	45	30.6
3	22	15.0
4	9	6.1
5	2	1.4
6	4	2.7
7以上	3	2.0
計	147	100.0

スポーツクラブの入会月数を見ると、表15に示す通り、25カ月以上の者が36名（24.4%）となり、しており、約 $\frac{1}{4}$ の者が2年以上もの長期間、一定のスポーツクラブに加入していることがわかる。次いで3～6カ月と回答した者

が33名(22.5%)と好まれている。この点から考えると、特定のスポーツに参加する時、6カ月以上の参加を継続している子とせば、そのスポーツに長期にわたって参加している傾向があると思われる。

表15 入会月数

	N	%
~3カ月	21	14.3
~6	33	22.5
~9	8	5.4
~12	14	9.5
~15	11	7.5
~18	15	10.2
~21	2	1.4
~24	7	4.8
25~	36	24.4
計	147	100.0

スポーツクラブでの会費(1カ月)をみると表16に示す通りである。1カ月1000円から1500円とする者が最も多く46名(31.3%)であり、次いで500円から1000円とする者が28名(19.1%)であり、だが、3000円以上の会

費を納入してゐる者を手とめてみると、48名(32.6%)あり、スポーツクラブの形態が、企業的なものが多いことが推測される。また0~500円と回答した者が6.1%と少率であり、スポーツクラブにおいて、特定のスポーツをする場合、いくらかの出費は認められてゐると考えられる。

表16 スポーツクラブ会費

	N	%
0~500	9	6.1
~1000	28	19.1
~1500	46	31.3
~2000	7	4.8
~2500	6	4.1
~3000	3	2.0
~3500	15	10.2
~4000	3	2.0
~4500	15	10.2
4500~	15	10.2
計	147	100.0

次に、学校や、学校以外のスポーツクラブ

以外で、自分で定期的なスポーツを実施して  
いるかをみると、表17に示すように、してい  
る者は、わずか37名(7.9%)しかなく、子  
ども達は、スポーツを実施する際に、何んら  
かの形でスポーツの場が提供されなければス  
ポーツ活動は行われたいことをこの語、でい  
る。

表17 自分で定期的(週1回以上)にスポーツ実施

	N	%
している	37	7.9
していない	434	92.1
計	471	100.0

次に、子どもがスポーツをする際に両親が  
子どもに対して励ましをにかけているかをみた  
ものが表18と表19である。これによると、父  
親よりも母親の方が、子どもに励ましのこと  
をにかけている割合が多いことがわかる。

この点、は、家庭にいてることが多い母親と、  
仕事を持っていてること以外に出る機会が多い  
父親との役割の差として受けとめることがで  
きる。しかしながら、他の研究において、子

どもにとって、スポーツ活動に関する、重要な  
 ほか者 ( Significant other ) として、父親を  
 あげているものが多いことを考えると非常に  
 興味深い。母親よりも数少ない父親のあげま  
 しのことは、子どもへの印象に深く残るもの  
 として考えることもできるが、この点に関し  
 ては、両親のスポーツ活動とも重要な関連が  
 あると思われるので後述したい。

表18 父親、子どもへの印象

	N	%
良い	95	20.2
たまたま	172	36.5
特にない	181	38.4
N.A.	23	4.9
計	471	100.0

表19 母親、子どもへの印象

	N	%
良い	167	35.5
たまたま	186	39.5
特にない	100	21.2
N.A.	18	3.8
計	471	100.0



3) 両親のスポーツ活動：本人の社会化工  
 - ジェントとして両親のスポーツ活動を考察  
 する。父親の、小、中、高、大学時における  
 スポーツ活動をみたものが表20から表23であ  
 る。小学校時代には、していた者217名(46  
 .6%) 中学校時代には、326名(90.1%) 高  
 校時代には、255名(57.1%) 大学時代には  
 123名(39.8%) である。

スポーツ種目としては、小学校時代は、野  
 球が118名(54.4%)が最も多く、次いで陸  
 上競技19名(8.8%)となり、野球が他の種  
 目を圧倒的に上回っている。中学校時代にお  
 いても、野球が102名(31.3%)と高率であ  
 るが、学校クラブとの関連で種目も増え、陸  
 上競技31名(9.5%) バスケットボール31名  
 (9.5%) 卓球29名(8.9%)、バレーボ  
 ール28名(8.6%)なども上がっている。高校  
 時代においては、野球52名(20.4%)、バレー  
 ボール31名(12.2%)柔道27名(10.6%)  
 などが上位である。大学時代においては、

多種目化傾向があり、登山、野球、柔道が、それぞれ、16.3%、12.2%、9.8%を示し上位である。

表20 小学校でのスポーツ活動(父親)

	N	%	%(AD)
していた	217	46.1	46.6
していなかった	249	52.9	53.4
N.A.	5	1.0	—
計	471	100.0	100.0

表21 中学校でのスポーツ活動(父親)

	N	%	%(AD)
していた	326	69.2	70.1
していなかった	139	29.5	29.9
N.A.	6	1.3	—
計	471	100.0	100.0

表22 高校でのスポーツ活動(父親)

	N	%	%(AD)
していた	255	54.1	57.2
していなかった	191	40.6	42.8
N.A.	25	5.3	—
計	471	100.0	100.0

表23 大学でのスポーツ活動(父親)

	N	%	%(AD)
していた	123	26.1	39.8
していなかった	186	39.5	60.2
N.A.	162	34.4	—
計	471	100.0	100.0

母親の、小、中、高、そして大学時代にお  
 け子スポーツ活動をみたものの、表24から表  
 27である。全体にわたり父親と比較して低調  
 であるが、小学校時代には、スポーツをして  
 いた者が113名(24.0%)、中学校時代には  
 232名(49.4%)、高校時代には、147名(  
 32.7%)、大学時代には31名(12.0%)とな  
 り、スポーツ実施の割合の順は、父親  
 と同様に、中学校>高校>小学校>大学の順  
 位で少くなる、という。

小学校時代の種目を見ると、陸上競技30名  
 (26.6%)が最も多く、次いでドッジボール  
 24名(21.2%)、卓球10名(8.6%)である。た  
 だ、中学校時代は、バレーボール53名(22.8%)  
 が最も多く、卓球38名(16.4%)、テニス37  
 名(16.0%)、ソフトボール25名(10.8%)とな  
 り、卓球が上位である。高校時代は、卓球27名(  
 18.4%)、テニス25名(17.0%)、バレーボ  
 ール24名(16.3%)、ソフトボール15名(10  
 .2%)となり、卓球が上位である。大学時代におい

では、 $\bar{F} = 17$ 名 ( 54.8% ) が最も多か、 $\bar{F}$ 。

表 24 小学校でのスポーツ活動(母親)

	N	%	%(AD)
17以下	113	24.0	24.0
17以上	357	75.8	76.0
N.A.	1	0.2	—
計	471	100.0	100.0

表 25 中学校でのスポーツ活動(母親)

	N	%	%(AD)
17以下	232	49.3	49.4
17以上	238	50.5	50.6
N.A.	1	0.2	—
計	471	100.0	100.0

表 26 高校でのスポーツ活動(母親)

	N	%	%(AD)
17以下	147	31.2	32.7
17以上	302	64.1	67.3
N.A.	22	4.7	—
計	471	100.0	100.0

表 27 大学でのスポーツ活動(母親)

	N	%	%(AD)
17以下	31	6.6	12.0
17以上	228	48.4	88.0
N.A.	212	45.0	—
計	471	100.0	100.0

以上両親の学校時代のスポーツ活動を見てきたわけであるが、諸結果からまとめると次のよう考察のまとめができる。

○全般にわたって父親の方が、母親よりもスポーツ活動をしていた割合が高い。

○両親とも中学校時代のスポーツ参加が最も多く、次いで高校、小学校、大学の順であった。

○父親は、学生時代に「野球」に最も参加する割合が高いが、母親には、野球程の高率を示す参加スポーツがない。

次に、現在の両親のスポーツ活動を見てきた。

現在の両親のスポーツ活動を見たものが、表28と表29である。現在何んらかのスポーツ活動をしている父親は236名(50.1%)であり母親は146名(31.0%)であった。父親が行っている種目としては、ゴルフが123名(52.1%)で最も多く、次いで野球が68名(28.8%)であった。これは、近年のゴルフが

ームや、卓球ゲームの影響であろう。その他、ソフトボール、テニスなども比較的高率で、それぞれ20名(8.5%)、20名(8.5%)を示していた。一方母親は、バレーボールとテニスが同数で最も多く35名(24.0%)で、次いで体操22名(15.1%)、卓球20名(13.7%)などが高率であり、ママさんバレーボールゲームの発展、テニスゲームなどがその原因としてあげられよう。

表 28 現在のスポーツ活動(父親)

	N	%	%(AD)
12113	236	50.1	50.3
1211811	233	49.5	49.7
N.A	2	0.4	—
計	471	100.0	100.0

表 29 現在のスポーツ活動(母親)

	N	%	%(AD)
12113	146	31.0	31.0
1211811	325	69.0	69.0
N.A	0	0.0	—
計	471	100.0	100.0

次に、両親の現在の子どものスポーツ活動を見たものから表30と表31である。ここでも父親が母親以上に(約2倍)活動していることがわかる。実数には、父親で子どもとスポーツをしていいる者100名(21.3%)母親では、55名(11.7%)と少ない値である。その理由としては、多忙であると記入した者が、圧倒的であり、忙しい現代生活の一端を見せている。父親の子どもとスポーツ種目としては野球が40名(40.0%)で最も多く、他の種目は非常に少なかった。また、母親の子どもとスポーツ種目としては、バレーボールが14名(25.5%)で最も多かった。

表30 子どもとスポーツ活動(父親)

	N	%	%(AD)
している	100	21.2	21.3
していない	367	78.3	78.7
N.A.	2	0.4	—
計	471	100.0	100.0

表31 子どもとスポーツ活動(母親)

	N	%	%(AD)
している	55	11.7	11.7
していない	416	88.3	88.3
N.A.	0	0.0	—
計	471	100.0	100.0

以上をまとめると、

・現在の両親のスポーツ活動として父親は約半数、母親は約3割の者が実施し、種目としては、父親が、ゴルフ、野球、母親が、バレーボール、テニスが高率であった。

・子どもとのスポーツ活動は、やはり両親とも低調で、父親は約2割、母親は約1割にとどまり、種目として、父親は野球、母親はバレーボールが多かった。

4) まようだいのスポーツ活動：本人のスポーツ活動に影響を持つものとして、まようだいのスポーツ参加を考えたいる研究も多いが、その全てが、本人のスポーツ活動と、まようだいのスポーツ活動には、有意な連関を見出しにくい。

(1) すぐ上のまようだい：本人のすぐ上のまようだいに関して見たものが表32から表35である。表32が示すように、すぐ上のまようだいがいる者237名(50.3%)いれば、者が234



名 ( 49.7% ) であつた。

また、本人との年齢差は表 33 に示す通り、3才が最も多く 78 名 ( 32.9% ) 次いで 2才 66 名 ( 27.9% )、4才 39 名 ( 14.6% ) であつた。

すくじのまようたの性別は、表 34 に示すように、男 124 名 ( 52.3% )、女 113 名 ( 47.7% ) とほぼ同率であつた。

表 32 すくじのまようた

	N	%
い子	237	50.3
いはい	234	49.7
計	471	100.0

表 33 年齢差

	N	%
0才	2	0.8
1	17	7.2
2	66	27.9
3	78	32.9
4	39	14.6
5	16	6.7
6	14	5.9
7	2	0.8
8	1	0.4
9	2	0.8
計	237	100.0

表 34 性別

	N	%
男	124	52.3
女	113	47.7
計	237	100.0

すく上のまほうだいの、定期的な(週1回以上)スポーツ活動の実施をみたものが表35である。これによると、していい者、していい者が、115名で同数であった。

表 35 定期的なスポーツの実施

	N	%	% (AD)
していい	115	48.5	50.0
していい	115	48.5	50.0
N.A.	7	3.0	—
計	237	100.0	100.0

(2) すく下のまほうだいの：本人のすく下のまほうだいのについてみたものが表36から表39である。

表36に示すように、すく下のまほうだいのが

い子者は、246名(52.2%)で、いはい者は、225名(47.8%)でありほぼ同率である。た。年齢差は、2才が98名(39.8%)、3才が68名(27.6%)、4才が29名(11.8%)を示してい子(表37)性別は男122名(49.6%)女124名(50.4%)でありほぼ同率である。た。

表36 下のいはい

	N	%
い子	246	52.2
いはい	225	47.8
計	471	100.0

表37 年齢差

	N	%
0才	5	2.0
1	18	7.3
2	98	39.8
3	68	27.6
4	29	11.8
5	14	5.7
6	6	2.6
7	3	1.2
8	4	1.6
9	1	0.4
計	246	100.0

表 38 性別

	N	%
男	122	49.6
女	124	50.4
計	246	100.0

また、すぐ下のまようだいの、定期的ほス  
ポーツ活動の実施をみたものか表 39 である。  
表 39 に示すように、定期的ほスポーツを実施  
してい子者は 54 名 ( 22.7% ) とほ、てあり、  
この値は、本人のすぐ上のまようだいのスポ  
ーツ活動実施より少ほいことかわかる。

表 39 定期的スポーツ実施

	N	%	% (A.D)
してい子	54	22.0	22.7
していほい	184	74.8	77.3
N.A.	8	3.2	—
計	246	100.0	100.0

## ( 2 ) クロス表分析の結果から

クロス表分析の結果、5%水準で有意ほ連  
関かある、た項目間を中心に考察をすかめてい

きたい。

表40は、本人の学年と学校のスポーツクラブ参加との関連をみたものであるが、小学校1年から3年にかけては、学校のスポーツクラブ参加は極めて少く、4年には、ほぼじめて、学校のスポーツクラブに参加できる状況が理解できる。2項目の<sup>註1)</sup>連関を示すクラマ-のV係数( $\sqrt{cr}$ )は、有意性0.1%水準で高く、0.398を示した。これは、学校におけるクラブ活動で、何故低学年の児童が、疎外されているのかを問いたださなければならぬ問題として提起できよう。

表40 学年と学校クラブ参加

	67		113		計
	N	%	N	%	
幼・1年	1	1.2	85	98.8	86
2	0	0.0	100	100.0	100
3	3	3.1	94	96.9	97
4	32	37.6	53	62.4	85
5	28	46.7	32	53.3	60
6	21	53.8	18	46.2	39

\*  $\sqrt{cr} = 0.398$   $S < 0.1\%$

註1) クラマ-のV係数( $\sqrt{cr}$ )は  $n \times r$  表の場合に求められた  $X^2$  値を  $0 \sim 1$  に修正し、1の時完全連関と作る。(  $n, r > 2$  )

次に、性別と学校のスポーツクラブ参加、及び、学校外のスポーツクラブ参加をみると、表41に示すように、学校のスポーツクラブ参加は、性差と何んら関連がなく、して見る名もしていい名もほぼ同率であるのに対し、学校外のスポーツクラブ参加の方は、表42に示すように、男に比べて女の参加割合が低いことを示している。表42での項目間の<sup>註1)</sup> 連関を表すφ(ファイ)係数は、0.249で、有意性0.1%水準である。

表41 性別と学校クラブ参加

	して いる		して いない		計
	N	%	N	%	
男	40	17.8	186	82.2	227
女	45	18.6	198	81.4	244

\* 有意な連関なし

表42 性別と学校外スポーツクラブ参加

	して いる		して いない		計
	N	%	N	%	
男	98	43.2	129	56.8	227
女	49	20.1	195	79.9	244

 $\phi = 0.249$   $S < 0.1\%$ 

註1) φ(ファイ)係数は2×2表の時に0~1の間で2項目間の連関を示す φ=1.000ならば完全連関。

これらの結果から学校のスポーツクラブは男女均等のスポーツ参加の機会を与えているのに対し、学校外のスポーツクラブでは、性差が大きく影響し、女子のスポーツ活動の機会が少ないことがわかる。そこで、前述のよ  
うに、学校のスポーツクラブの参加を低学年にまで広げることの持つ意味は大きいと考えられよう。当然のことながら、この提起は、実現段階での方法論が非常に難しいことも予測され、いろいろな問題を含んでいるといえよう。

次に、年収とスポーツ活動の関連をみたものが表43と表44である。

表43では、年収と父親の現在のスポーツ活動の関係が表われており、年収が多いほど、スポーツ活動をしている者の割合が増える傾向を示している。クramerのV係数は0.208で、0.1%水準で有意であった。表44は、年収と本人のすぐ下のまようだいのスポーツ活動との関連を示しており、これも、父親と同

様に、年収が増えればスポーツ活動をしてい  
 る者の割合が大きいことを示している。しか  
 し、父親ほどその傾向は強くはない。(クラマ  
 ーのV係数は0.162で5%水準で有意であ  
 る。)その他には、年収と有意な連関のある項  
 目はなかった。

表43 年収と父親現在のスポーツ活動

	して いる		して いない		計
	N	%	N	%	
~200万	0	0.0	7	100.0	7
~300	10	29.6	24	71.4	34
~400	43	42.6	58	57.4	101
~500	76	60.2	50	39.8	126
~600	40	56.3	31	43.7	71
~700	27	58.7	19	41.3	46
700~	29	64.4	16	35.6	45

\*  $\chi^2_{df=6} = 0.208$   $S < 0.1\%$ 

表44 年収と子どもがやりたいスポーツ活動

	して いる		して いない		計
	N	%	N	%	
~200万	0	0.0	2	100.0	2
~300	1	4.4	22	95.6	23
~400	7	12.7	48	87.3	55
~500	16	25.0	48	75.0	64
~600	8	28.6	20	71.4	28
~700	9	37.5	15	62.5	24
700~	6	30.0	14	70.0	20

\*  $\chi^2_{df=6} = 0.162$   $S < 5\%$



表45は、家族内男性数と、本人のすぐ上のまようだいのスポーツ活動との連関をみたものであり、家族内男性数が増すにしたがって、スポーツ活動をしていいる者の割合が増えることを示している(クラマ-のV係数は0.359で、0.1%水準で有意な連関がある。)

表45 家族内男性数とすぐ上のまようだいのスポーツ活動

	して いる		して いない		計
	N	%	N	%	
1人	13	32.5	27	67.5	40
2	47	50.0	47	50.0	94
3	39	55.7	31	44.3	70
4	13	65.0	7	35.0	20

$$X \cdot \sqrt{r} = 0.359 \quad 5 < 0.1\%$$

表46は、家族内女性数と、本人のすぐ下のまようだいのスポーツ活動との関連をみたものであり、上記の家族内男性数とは逆に、家族内女性数が増すにしたがって、スポーツ活動をしていいる者の割合が減少することと示している。クラマ-のV係数は0.348で、0

0.1%水準で有意な連関がある。F=)

表46 家族内姉妹数とすぐ下の姉妹のスポーツ活動

	1人	2人	3人	4人	計
	N	%	N	%	
1人	29	60.4	19	39.6	48
2人	48	53.3	42	46.7	90
3人	32	42.7	43	57.3	75
4人	4	28.6	10	71.4	14

\*  $\sqrt{cr} = 0.348$   $S < 0.1\%$

表47と表48は、父親の現在のスポーツ活動と、小学校、中学校でのスポーツ活動の関連をみたものである。表47に示すように、父親の現在のスポーツ活動と小学校でのスポーツ活動との連関は $\phi$ 係数0.261で、0.1%水準で有意であり、小学校時代に、スポーツ活動をしていった者は、現在もスポーツ活動をしてい子者が多く、していいが、た者は、現在スポーツをしていい傾向が強いことがわかる。また、表48に示すように、中学校でのスポーツ活動との関連でも、小学校でのスポーツ活動と同様な傾向がみられる。(中係数は0.2

52で、0.1%水準で有意な連関を示している。

また、父親の現在のスポーツ活動と高校でのスポーツ活動との有意な連関はない。

表 47 現在のスポーツ活動と小学校でのスポーツ活動(父親)

	して いた		して いない		計
	N	%	N	%	
している	129	55.6	103	44.4	232
していない	87	37.3	146	62.7	233

\*  $\chi^2 = 0.261$   $S < 0.1\%$

表 48 現在のスポーツ活動と中学校でのスポーツ活動(父親)

	して いた		して いない		計
	N	%	N	%	
している	177	76.6	54	23.4	231
していない	148	63.5	85	36.5	233

\*  $\chi^2 = 0.252$   $S < 0.1\%$

次に父親の、子どもとのスポーツ活動と、小学校、中学校、高校時代のスポーツ活動との関連をみたものが、表49から表51である。

小学校、中学校、高校、それぞれにおけるスポーツ活動を行っていた者は、現在も、子どもとスポーツ活動を行っていたり傾向が強いことを示しており、それぞれ中係数は、

0.252, 0.233, 0.167 と な っ て お り . 全 て  
0.1% 水 準 で 有 意 な 連 関 を し め し て い た .

表 49 子 ども の スポーツ 活 動 と 小 学 校 で の スポーツ 活 動 (父 親)

	し て い た		し て い け ない		計
	N	%	N	%	
し て い け ない	62	62.0	38	38.0	100
し て い た	154	42.2	211	57.8	365

\*  $\phi = 0.252$   $S < 0.1\%$

表 50 子 ども の スポーツ 活 動 と 中 学 校 で の スポーツ 活 動 (父 親)

	し て い た		し て い け ない		計
	N	%	N	%	
し て い け ない	78	78.0	22	22.0	100
し て い た	247	67.9	117	32.1	364

\*  $\phi = 0.233$   $S < 0.1\%$

表 51 子 ども の スポーツ 活 動 と 高 校 で の スポーツ 活 動 (父 親)

	し て い た		し て い け ない		計
	N	%	N	%	
し て い け ない	92	95.8	23	24.2	95
し て い た	183	52.3	167	47.7	350

\*  $\phi = 0.167$   $S < 0.1\%$

表 52 か ら 表 54 は . 母 親 の 現 在 の スポーツ 活 動 と . 小 . 中 . 高 校 時 代 の スポーツ 活 動 と の 関 連 を 示 し た も の で あ る . 表 52 に お い て 示 さ れ る よ う に . 母 親 の 小 学 校 で の スポーツ 活 動 と 現 在 の スポーツ 活 動 と の 関 連 は . 両 項 目 と も し て い け ない 者 の 割 合 が 非 常 に 高 い 傾 向 が あ

る。(φ係数0.120で5%水準で有意)表53  
 で示すように、母親の現在のスポーツ活  
 動と中学校でのスポーツ活動との関係は、現  
 在スポーツ活動をしている者は、中学校時代  
 もしていた者が多く、現在していない者は、  
 中学校時代もしていない者が多いということ  
 がわかる。(φ係数0.210で0.1%水準で有  
 意)

表54で示すように、母親の現在のスポーツ  
 活動と高校でのスポーツ活動の関係は、表52  
 の小学校時代の関係と同じように、高校時代  
 において、スポーツ活動をしている者が、  
 現在もしていない者の割合が非常に高い傾向  
 があるといえよう。(φ係数は0.144で1%  
 水準で有意)

また、表55から表57は、母親の現在の子ども  
 もとのスポーツ活動と学校時代のスポーツと  
 の関係をみたもので表55と表57に示す、小学  
 校、高校でのスポーツ活動との関係において  
 両項目とも行っている者の割合が高く、

表52 現在のスポーツ活動と小学校でのスポーツ活動(母親)

	した		していない		計
	N	%	N	%	
した	47	32.2	99	67.8	146
していない	66	20.4	258	79.6	324

\*  $\phi = 0.120$   $S < 5\%$ 

表53 現在のスポーツ活動と中学校でのスポーツ活動(母親)

	した		していない		計
	N	%	N	%	
した	94	64.4	52	35.6	146
していない	138	42.6	186	57.4	324

\*  $\phi = 0.210$   $S < 0.1\%$ 

表54 現在のスポーツ活動と高校でのスポーツ活動(母親)

	した		していない		計
	N	%	N	%	
した	60	42.6	81	57.4	141
していない	87	28.3	221	71.7	308

\*  $\phi = 0.144$   $S < 1\%$ 

表55 子どもへのスポーツ活動と小学校でのスポーツ活動(母親)

	した		していない		計
	N	%	N	%	
した	23	41.8	32	58.2	55
していない	80	21.7	325	78.3	415

\*  $\phi = 0.145$   $S < 1\%$ 

表56 子どもへのスポーツ活動と中学校でのスポーツ活動(母親)

	した		していない		計
	N	%	N	%	
した	39	20.9	16	29.1	55
していない	193	46.5	222	53.5	415

\*  $\phi = 0.158$   $S < 1\%$ 

表57 子どもへのスポーツ活動と高校でのスポーツ活動(母親)

	した		していない		計
	N	%	N	%	
した	26	49.1	27	50.9	53
していない	121	30.6	275	69.4	396

\*  $\phi = 0.126$   $S < 5\%$

それぞれ中係数0.145(1%水準で有意)、  
 0.126(5%水準で有意)の連関があった。  
 また、現在の子どもとのスポーツ活動と中学校  
 校でのスポーツ活動の関連をみた表56では、  
 中学校時代にスポーツをしていた者は現在も  
 している傾向があり、していないかっただけは、  
 現在もしていないという傾向が若干あるとい  
 えよう。(中係数は0.158で1%水準で有意  
 であった)

### (3) スポーツ参加の要因

これまで述べてきた、水泳教室参加者を対  
 象とした調査結果から、スポーツ参加の要因  
 とする項目を、まとめとしてあげておきたい。

#### (1) 性差

スポーツ参加は、性差によって影響を受け  
 ており、男性>女性の不等式が成立するとい  
 えよう。(性差によるクラブ参加の割合、父  
 親、母親のスポーツ活動の差、家族内男性数  
 と女性数がスポーツ活動に影響する点などの  
 理由から)

## (2) 年収

スポーツ参加は、その家庭の年収が多い程促進される傾向がみられる。

## (3) 両親のスポーツ参加

両親の現在のスポーツ参加は、自らの学生時代のスポーツ参加と密接な関係があり、父親は、中学校、小学校のスポーツ参加が、母親は、小学校、中学校、高校でのスポーツ参加が、関連深い。これは、両親の子どものスポーツ参加をみてもほぼ同様の傾向があった。

## (4) 年長のまようだい

本人の上のまようだいがスポーツに参加している割合は、下のまようだいはりて上回っている。しかしながら、対象者の年齢を考える時、現在の教育制度の中でのスポーツクラブのあり方もふまえておかなければならない。

## 第2節 小学校5.6年児童の調査から

水泳教室参加者調査とは別に、習志野市立屋敷小学校5.6年児童を対象に調査を行って



た結果からの考察をすすめていく。

(1) 基本的属性：学年別の集計は、表58に示す通りであり5年6年ともほぼ同数である。

表58 学年

	N	%
5年	186	48.8
6	195	51.2
計	381	100.0

また性別は表59に示す通りであり、男女とも、ほぼ同数である。

表59 性別

	N	%
男	189	49.6
女	192	50.4
計	381	100.0

(2) 本人のスポーツ参加

(1) 学校体育に関して

学校での体育授業に関する子ども達の意見をみたものが表60と表61である。

た結果からの考察をすすめていく。

(1) 基本的属性：学年別の集計は、表58に示す通りであり5年6年ともほぼ同数である。

表58 学年

	N	%
5年	186	48.8
6	195	51.2
計	381	100.0

また性別は表59に示す通りであり、男女とも、ほぼ同数である。

表59 性別

	N	%
男	189	49.6
女	192	50.4
計	381	100.0

(2) 本人のスポーツ参加

(1) 学校体育に関して

学校での体育授業に関する子ども達の意見をみたものが表60と表61である。

表60に示すように、学校体育を「好き」と回答しているものは341名(89.5%)であり、非常に高率であった。また学校体育を好きは理由としては、「からだを思いやり動かせる」と回答した者が最も多く、120名(35.2%)次いで「他の授業よりも楽しい」と回答した者85名(24.9%)「できる運動ができるようになる」という理由が71名(20.8%)であり、表61に示すような構成となっている。

表60 学校体育の好き嫌い

	N	%
好き	341	89.5
嫌い	40	10.5
計	381	100.0

表61 学校体育の好きの理由

	N	%
他の授業より楽しい	85	24.9
先生の指導がよい	5	1.5
からだを思いやり動かせる	120	35.2
運動がいろいろできる	46	13.5
先生や友だちにほめられる	6	1.8
できる運動ができるようになる	71	20.8
その他	8	2.3
計	341	100.0

(2) 学校のスポーツクラブに関して

学校でのスポーツクラブへの参加をみたものが表62であり、参加している者は157名(41.4%)であり、この値は、ほぼ水泳教室調査の学年別学校クラブ参加の結果と一致している。以前参加していた者は、116名(30.6%)、参加したことがないものは106名(28.0%)であった。

表62 学校クラブへの参加

	N	%	%(AD)
している	157	41.2	41.4
以前していた	116	30.4	30.6
したことがない	106	27.8	28.0
N. A.	2	0.6	—
計	381	100.0	100.0

また、学校のスポーツクラブへの参加理由をみたものが、表63である。最も多い値を示しているものが「その種目が好きだから」をあげる者が70名(44.6%)、次いで「からだをじょうぶにしたいから」が、55名(35.0%)

となり、以下は表に示す通りである。

表 63 学校クラブ参加理由

	N	%
その種目が好きだ	70	44.6
その種目が好きだった	23	14.7
体育の成績を上げた	2	1.3
その種目がはやい	0	0.0
からだを動かすのが好き	55	35.0
コーチの先生が好きだ	0	0.0
友だちと一緒に	2	1.3
その他	7	3.1
計	157	100.0

次に、「学校のスポーツクラブの時間が待ちどうしいか」という設問に対して「そう思う」と回答した者は114名(80.3%)と高率であった。(表64)

表 64 学校クラブが待ちどうしいか

	N	%	% (AD)
思う	114	72.6	80.3
思わない	28	17.8	19.7
N.A.	15	9.6	—
計	157	100.0	100.0

(3) 学校以外のスポーツクラブ参加に関して  
 学校外のスポーツクラブ参加をみたものが  
 表 65 であり、現在参加している者は 102 名 (27.2%)、  
 以前参加していた者は 85 名 (22.7%)、  
 参加したことがない者は 188 名 (50.1%)  
 %) である。

表 65 学校外スポーツクラブ参加

	N	%	%(AD)
している	102	26.8	27.2
以前していた	85	22.3	22.7
したことがない	188	49.3	50.1
N.A.	6	1.6	—
計	381	100.0	100.0

また、スポーツクラブの参加理由をみたものが、  
 表 66 である。表 66 に示す通り、「その  
 種目が好きだから」と回答する者が最も多く  
 36 名 (35.3%) であり、以下、「からだをじ  
 ょうぶにしたい」「その種目がうまくやりたい  
 い」「学校ではできない種目だから」とい  
 る理由としてあげている。これらの理由は、学

校でのスポーツクラブ参加理由とほぼ同じであり、スポーツ参加における共通の要因と思われる。

表 66 スポーツクラブ参加理由

	N	%
その種目が好きだ	36	35.3
その種目がまわりたい	18	17.7
体育の成績を上げたい	1	1.0
その種目がやっているからとしようぶにしたい	19	18.6
コーチが好きだ	0	0.0
友達と一緒に行きたい	2	1.9
学校ではできない種目	16	15.7
学校だけでは不足	3	2.9
その他	7	6.9
計	102	100.0

スポーツクラブ参加を誰にすすめられたかを見てものが表 67 と表 68 である。表 67 は現在参加している者、表 68 は過去に参加していた者のものである。現在も参加している者では「自分」と回答した者 51 名 (50.0%)、次に「その他 (友達か 9 割以上をしめた)」22 名 (21.6%)、そして母親、父親の順であるのに対

し、過去に参加していた者の方は、「その他」28名(32.8)、次いで「自分」27名(31.8%)を以て母親22名(25.9%)父親の順であった。両方とも、まあうたい、学校の先生の在りる割合は非常に低くは、ていする。

この結果からの考察としては、現在に参加してている者の方が、自分からすすんで、つまり自発的に参加してている傾向が強く、途中でやめてしまった者の7割は他者にすすめられていている者が多い傾向があり、スポーツの継続的参加には自発的参加が重要であることが考えられる。

表67 誰にすすめられたか  
(している者)

	N	%
父親	11	10.8
母親	14	13.7
お父さん	4	3.9
先生	0	0.0
自分	51	50.0
その他	22	21.6
計	102	100.0

表68 誰にすすめられたか  
(していない者)

	N	%
父親	6	7.1
母親	22	25.9
お父さん	2	2.4
先生	0	0.0
自分	27	31.8
その他	28	32.8
計	85	100.0



## (3) スポーツへの間接的参加

表69から表74までは、G.S.ケニヨンのスポーツの「二次的参加」に対応させた調査結果である。表69ではテレビのスポーツ番組、表70では新聞のスポーツ記事、表71では、スポーツに関する本雑誌、表72では、スポーツのマンガ、表73では、スポーツに関する会話、表74ではスポーツの試合、大会についてそれぞれの参加の度合いを示している。「よく…」と「たまに…」を合計すると、

1. テレビのスポーツ番組が94.7%

2. スポーツに関する会話が84.5%

3. スポーツのマンガが80.6%

4. 新聞のスポーツ記事が72.6%

5. スポーツの試合・大会が64.9%

6. スポーツに関する本等が63.6%

であり、テレビ世代、脱活字世代の子どもの性向がうかがえる。これは手頃な項目ほど高い比率を示しているといえる。

ここで本節をまとめみることにする。

表69 テレビのスポーツ番組

	N	%	%(AD)
よくみる	115	30.2	30.4
たまにみる	243	63.8	64.3
みない	20	5.2	5.3
N.A.	3	0.8	—
計	381	100.0	100.0

表70 新聞のスポーツ記事

	N	%	%(AD)
よくみる	98	25.7	25.9
たまにみる	177	46.5	46.7
みない	104	27.3	27.4
N.A.	2	0.5	—
計	381	100.0	100.0

表71 スポーツに関する本・雑誌

	N	%	%(AD)
よく読む	51	13.4	13.5
たまに読む	190	49.9	50.1
よまない	138	36.2	36.4
N.A.	2	0.5	—
計	381	100.0	100.0

表 72 スポーツのマンガ

	N	%	%(AD)
よくみる	135	35.4	35.7
たまにみる	170	44.6	44.9
みない	73	19.2	19.4
N.A.	3	0.8	—
計	381	100.0	100.0

表 73 スポーツに関する会話

	N	%	%(AD)
よくする	92	24.1	24.5
たまにする	225	59.1	60.0
しない	58	15.2	15.5
N.A.	6	1.6	—
計	381	100.0	100.0

表 74 スポーツの試合 大会

	N	%	%(AD)
よくみる	31	8.1	8.2
たまにみる	215	56.4	56.7
みない	133	34.9	35.1
N.A.	2	0.5	—
計	381	100.0	100.0

子ども達は、学校での体育の授業に対して大変好意的であり、4割以上の者が、学校のスポーツクラブに参加している。学校外のスポーツクラブには約3割近くの者が参加し、スポーツ参加の理由として、「種目が好きであること」「からだをじょうぶにすること」「その種目の技術向上」などが共通してあげられ、学校のスポーツクラブも、学校外のスポーツクラブもほぼ同様であることから、これらは、スポーツ参加の要因と考えられる。最も、スポーツ参加に対して重要であり、たゞ者は「自分」であり、途中でスポーツクラブをやめた者は他律的参加の傾向が強いことがあげられる。

情報化社会において、やはり高率で見られるスポーツへの間接的参加の中でも「テレビのスポーツ番組」が1位を占めていたことなどがまとめられよう。

## 第5章 スポーツにおける価値の分析

本章では、前章の調査結果と考察とは別に社会化の資質内容としての価値の分析を中心に論述していく。先の調査票の中で、水泳教室参加者の両親、さらに、屋敷小5、6年児童を対象に、それぞれのスポーツに対する価値意識を明らかにする項目が設定され、相当数の回答が得られた。これらの価値意識の全体から、スポーツにおける価値を導き出し、見田の価値類型を援用しつつ類型化を図り、社会化との関連性までを考究していく。

### 第1節 価値意識項目の設定

#### (1) 水泳教室参加者の両親のスポーツに対する価値意識項目

スポーツに対する両親の価値意識をみ子のために、水泳教室申し込み時に参加理由を、自由解答により、行ったおたがリテスト、と、先行研究において明らかにされたスポーツにおける価値から、本研究の価値の類型にとつての基準がある、時間的、社会的ハースペクテ

いふによつて、選ばれた項目が、以下に示す  
AからZの26項目となつて抽出された。

A; 勝たなければスポーツをやる価値がな  
い

B; スポーツ技術を高めさせることが望ま  
しい

C; スポーツをすると学校での体育の成績  
がよくなると思う

D; スポーツは個人の人間性を高める

E; スポーツをやる限りは大会に出られる  
よう選手になるべきだ

F; スポーツをすればクラスの人気者に  
なれる

G; スポーツをすれば運動がらゝかたおせ  
る

H; スポーツをすれば規律ある行動がとれ  
る

I; 子どもがスポーツで外にでてい子と手  
がつかからなるとよい

J; スポーツは熱中しすぎてはいけない

K; スポーツによつて精神力が強く

L; スポーツは子どもたち同志で楽しむのはよい

M; スポーツは現在の健康のためによい

N; 出費が多くてもスポーツをさせるべきだ

O; スポーツは望ましい人間関係をつくる

P; スポーツをする時は、良い記録や良い成績をとるべきだ

Q; スポーツをすれば団体行動がとれるようになる

R; スポーツは将来の健康のためによい

S; スポーツは楽しむことに価値がある

T; スポーツを通して子どもに勝負のまじしさを教えた

U; スポーツは、将来の体力づくりのためによい

V; スポーツは個人でやるよりもチームでやる方がよい

W; スポーツをすれば事故防止や安全につ

はかる

X; スポーツをやることはかゝり良い

Y; スポーツはチームでやるよりも個人で

やる方が良い

Z; スポーツはストレスの解消にやる

これらの26項目は、ワーキングの段階において熟慮をしたが、ことばの問題とも関連して、ほかほか一般化したこの調査項目では、いかにも知れたいが、一応の指針となることであらう。

(2) 屋敷小学校5、6年児童のスポーツ

に対する価値意識項目

前述の両親の場合と同様の規準で、子どもが理解可能であらうと思われるワーキングを行ない、最終的に両親に対応する価値意識項目を基礎に選ばれたのが、これからjまでの以下に示す10項目である。

a; スポーツは楽しむためにやるための。

b; スポーツをすれば体育の成績が上がる

c; スポーツをやるのはカッコイイ



d ; スポーツができるとクラスの人気者に  
ほれる

e ; スポーツをするからには勝たなければ  
意味がない

f ; スポーツはからだをまたえるためにお  
こはうものだ

g ; スポーツをするからには、大会に出ら  
れるような選手にすべきだ

h ; スポーツができるとクラスのリーダー  
にほれる

i ; スポーツは苦しさをとこはうものだ

j ; スポーツは心をもたえるためにおこは  
うものだ

### (3) 調査項目の尺度

水泳教室参加者の両親に対する価値意識項目  
に対しては

5. 「ひじょうにそう思う」

4. 「そう思う」

3. 「どちらともいえない」

2. 「そう思わない」

1. 「まったくそう思わへい」  
 という5段階の尺度を用いた。

また屋敷小学校5・6年児童に対する価値  
 意識項目に対しては

2. 「そう思う」  
 1. 「そう思わへい」  
 の2者択一の尺度を用いた。

これらの尺度に基づき統計処理を行へい。  
 価値意識分析を試みる。統計処理方法として  
 は以下に示す。2方法を用いた。

1. 単純集計(度数分布)に基づく処  
 理
2. 項目間の順位相関係数を求めて処  
 理

## 第2節 両親の価値意識分析

両親のスポーツに対する価値意識を、前節  
 のAからZの26項目についてみた父親、母親  
 別の単純集計結果が次ページ以降の表75から  
 表100までである。父親と母親のスポーツに  
 対する価値意識の全体的傾向をみるために、

表 75

勝に負けぬスポーツをする  
価値が高い (A)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. 非常にそう思う	15	3.2	0	0.0
4. そう思う	55	11.7	27	5.7
3. とららともいえない	97	20.6	91	19.3
2. そう思わない	223	47.3	260	55.2
1. まったくそう思わない	81	17.2	93	19.7
計	471	100.0	471	100.0

表 76

スポーツ技術を高めること  
が望ましい (B)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. 非常にそう思う	45	9.6	27	5.7
4. そう思う	297	63.1	274	58.2
3. とららともいえない	74	15.7	112	23.8
2. そう思わない	45	9.6	48	10.2
1. まったくそう思わない	10	2.1	10	2.1
計	471	100.0	471	100.0

スポーツをすると学校での体育  
の成績が良くなると思う (C)

表 77

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. 非常にそう思う	13	2.8	10	2.1
4. そう思う	176	37.4	134	28.5
3. とちうとよいと思う	157	33.3	187	39.7
2. そう思わない	109	23.1	120	25.5
1. またうそう思わない	16	3.4	20	4.2
計	471	100.0	471	100.0

スポーツは個人の人間性を  
高める (D)

表 78

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. 非常にそう思う	119	25.3	102	21.7
4. そう思う	265	56.3	275	58.4
3. とちうとよいと思う	67	14.2	75	15.9
2. そう思わない	17	3.6	17	3.6
1. またうそう思わない	3	0.6	2	0.4
計	471	100.0	471	100.0

表 79

スポーツをする限りは大会に  
おられるような選手になるべきだ (E)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. 必ひょうにそう思う	17	3.6	7	1.5
4. そう思う	105	22.3	58	12.3
3. とららともいえはい	139	29.5	146	31.0
2. そう思わはい	173	36.7	215	45.6
1. またくそう思わはい	37	7.9	45	9.6
計	471	100.0	471	100.0

表 80

スポーツをすればクラスの  
リーダーになれる (F)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. 必ひょうにそう思う	4	0.8	1	0.2
4. そう思う	40	8.5	34	7.2
3. とららともいえはい	148	31.4	136	28.9
2. そう思わはい	228	48.4	241	51.2
1. またくそう思わはい	51	10.8	59	12.5
計	471	100.0	471	100.0

表 81 スポーツをすれば運動がら  
いかなあせる (G)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひびょうにそう思う	33	7.0	30	6.4
4. そう思う	270	57.3	239	50.7
3. とちうともいへない	99	21.0	116	24.6
2. そう思われない	63	13.4	79	16.8
1. まったくそう思われない	6	1.3	7	1.5
計	471	100.0	471	100.0

表 82 スポーツをすれば規律ある  
行動がとれる (H)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひびょうにそう思う	82	17.4	64	13.6
4. そう思う	295	62.6	279	59.2
3. とちうともいへない	72	15.3	108	22.9
2. そう思われない	19	4.0	16	3.4
1. まったくそう思われない	3	0.6	4	0.8
計	471	100.0	471	100.0

子どもがスポーツで外にでていると  
表 83 手がから好く感じる (I)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひょうかに思う	7	1.5	7	1.5
4. そう思う	73	15.5	75	15.9
3. どちらともいえない	125	26.5	111	23.6
2. そう思わない	225	47.8	214	45.4
1. またかと思うはない	41	8.7	64	13.6
計	471	100.0	471	100.0

表 84 スポーツは熱中して打ては  
よく感じる (J)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひょうかに思う	13	2.8	5	1.1
4. そう思う	69	14.6	65	13.8
3. どちらともいえない	126	26.8	136	28.9
2. そう思わない	208	44.2	213	45.2
1. またかと思うはない	55	11.7	52	11.0
計	471	100.0	471	100.0

表 85 スポーツによる精神カ  
ガック (K)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひょうにそう思う	98	20.8	117	24.8
4. そう思う	312	66.2	290	61.6
3. とららともいはい	49	10.4	50	10.6
2. そう思わはい	10	2.1	11	2.3
1. またくそう思わはい	2	0.4	3	0.6
計	471	100.0	471	100.0

表 86 スポーツほ子ともたら同志で  
楽い女はい (L)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひょうにそう思う	13	2.8	9	1.9
4. そう思う	83	17.6	92	19.5
3. とららともいはい	168	35.7	151	32.1
2. そう思わはい	185	39.3	191	40.6
1. またくそう思わはい	22	4.7	29	5.9
計	471	100.0	471	100.0



表 87

スポーツは現在の健康の  
ためによい (M)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひじょうにそう思う	138	29.3	113	24.0
4. そう思う	298	63.3	322	68.4
3. とららともいえない	24	5.1	28	5.9
2. そう思わない	11	2.3	6	1.3
1. まったくそう思わない	0	0.0	2	0.4
計	471	100.0	471	100.0

表 88

出費が多くてもスポーツを  
させるべきだ (N)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひじょうにそう思う	29	6.2	20	4.2
4. そう思う	163	34.6	146	31.0
3. とららともいえない	173	36.7	197	41.8
2. そう思わない	95	20.2	94	20.0
1. まったくそう思わない	11	2.3	14	3.0
計	471	100.0	471	100.0

表 89 スポーツは望ましい人間関係を  
つくる (O)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひげょうにそう思う	101	21.4	89	18.9
4. そう思う	276	58.6	276	58.6
3. とちらともいえない	83	17.6	93	19.7
2. そう思わない	9	1.9	13	2.8
1. またかそう思わない	2	0.4	0	0.0
計	471	100.0	471	100.0

表 90 スポーツをするときは良い記録や  
良い成績をとるべきだ (P)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひげょうにそう思う	11	2.3	2	0.4
4. そう思う	114	24.2	67	14.2
3. とちらともいえない	184	39.1	179	38.0
2. そう思わない	140	29.7	190	40.3
1. またかそう思わない	22	4.7	33	7.0
計	471	100.0	471	100.0

表 91 スポーツをすれば「団体行動  
がとれるようになる (Q)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. 非常にそう思う	67	14.2	47	10.0
4. そう思う	305	64.8	311	66.0
3. どちらともいえない	76	16.1	94	20.0
2. そう思わない	21	4.5	18	3.8
1. まったくそう思わない	2	0.4	1	0.2
計	471	100.0	471	100.0

表 92 スポーツは将来の健康のために  
よい (R)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. 非常にそう思う	135	28.7	116	24.6
4. そう思う	293	62.2	309	65.6
3. どちらともいえない	39	8.3	39	8.3
2. そう思わない	3	0.6	6	1.3
1. まったくそう思わない	1	0.2	1	0.2
計	471	100.0	471	100.0

表 93 又スポーツは楽しむことに価値がある (S)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. 非常にそう思う	70	14.9	87	18.5
4. そう思う	251	53.3	242	51.4
3. とちうともいえない	119	25.3	107	22.7
2. そう思わない	28	5.9	33	7.0
1. まったくそう思わない	3	0.6	2	0.4
計	471	100.0	471	100.0

表 94 又スポーツを通して子どもに勝負の喜びを教えたい (T)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. 非常にそう思う	63	13.4	51	10.8
4. そう思う	228	48.4	221	46.9
3. とちうともいえない	103	21.9	134	28.5
2. そう思わない	69	14.6	57	12.1
1. まったくそう思わない	8	1.7	8	1.7
計	471	100.0	471	100.0

表 95

スポーツは将来の体力づくりの  
ためによい (U)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひげうにそう思う	137	29.1	123	26.1
4. そう思う	300	63.7	307	65.2
3. とららともいはい	31	6.6	37	7.9
2. そう思わはい	2	0.4	4	0.8
1. またくそう思わはい	1	0.2	0	0.0
計	471	100.0	471	100.0

表 96

スポーツは個人でするよりも  
チームでする方がよい (V)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. ひげうにそう思う	61	13.0	35	7.4
4. そう思う	177	37.6	174	36.9
3. とららともいはい	195	41.4	221	46.9
2. そう思わはい	37	7.9	39	8.3
1. またくそう思わはい	1	0.2	2	0.4
計	471	100.0	471	100.0

表 97 スポーツをすれば事故防止や  
安全にっはがる (W)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. どちらともいえない	38	8.1	27	5.7
4. そう思う	268	56.9	264	56.1
3. どちらともいえない	136	28.9	150	31.8
2. そう思わない	25	5.3	28	5.9
1. まったくそう思わない	4	0.8	2	0.4
計	471	100.0	471	100.0

表 98 スポーツをするとはかゝる良い  
と思う (X)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. どちらともいえない	4	0.8	12	2.5
4. そう思う	95	20.2	95	20.2
3. どちらともいえない	179	38.0	160	34.0
2. そう思わない	146	31.0	169	35.9
1. まったくそう思わない	47	10.0	35	7.4
計	471	100.0	471	100.0

表 99

スポーツはチームであるよりも  
個人である方がよい (Y)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. どちらにも思う	2	0.4	1	0.2
4. そう思う	10	2.1	5	1.1
3. とどちらともいえない	217	46.1	233	49.5
2. そう思わない	209	44.4	189	40.1
1. またかそう思わない	33	7.0	43	9.1
計	471	100.0	471	100.0

表. 100

スポーツはストレスを解消に  
なる (Z)

	父 親		母 親	
	N	%	N	%
5. どちらにも思う	83	17.6	100	21.2
4. そう思う	318	67.5	307	65.2
3. とどちらともいえない	57	12.1	61	13.0
2. そう思わない	10	2.1	3	0.6
1. またかそう思わない	3	0.6	0	0.0
計	471	100.0	471	100.0

非常によく受け入れられる項目（「そう思う」「むしろよいにそう思う」と回答する割合が高いもの）と、受け入れられていない項目（「そう思わない」「まったくそう思わない」と回答する割合が高いもの）とに分けて考察をすすめる。

この点を明確にするために、「むしろよいにそう思う」という回答と「そう思う」という回答を合計し、その支持のパーセンテージを10%ごとに区切り、まとめたものが、表101である。これによるとほぼ両親とも同様の傾向を示し、支持率が90%以上の項目から10%以下の項目までに分散していることがわかる。

特に支持率が高い項目（両親とも80%以上の支持がある項目）としては、

U；スポーツは将来の体力づくりのためによい

M；スポーツは現在の健康のためによい

R；スポーツは将来の健康のためによい

K；スポーツによつて精神力がつか



表101. 両親の価値意識項目と支持率

		( )内%					
		父 親			母 親		
100 ~ 90%		U(92.8)	M(92.6)	R(90.9)	M(92.4)	U(91.3)	R(90.2)
~ 80		K(87.0)	Z(85.1)	H(80.0)	K(86.4)	Z(86.4)	D(80.0)
~ 70		O(80.0)	Q(79.0)	B(72.7)	D(72.6)	O(77.5)	Q(76.0)
							H(72.8)
~ 60		S(68.2)	W(65.0)	G(64.3)	S(69.9)	B(63.9)	W(61.8)
		T(61.2)					
~ 50		V(50.6)			T(57.7)	G(57.1)	
~ 40		N(40.8)	C(40.2)		V(44.3)		
~ 30					N(35.2)	C(30.6)	
~ 20		P(26.5)	E(25.9)	X(21.0)	X(22.7)	L(21.4)	
		L(20.4)					
~ 10		J(17.4)	I(17.0)	A(14.9)	I(17.4)	J(14.9)	P(14.6)
					E(13.8)		
~ 0		F(9.3)	Y(2.5)		F(7.4)	A(5.7)	Y(1.3)

Z; スポーツはストレスの解消に於ける

とい、たスポーツの心身に及ぼす機能的側面

として捉えられる5項目であ、た。

その一方、非常に支持率が低い項目(両親

ともに20%未満の支持しか得ない項目)として

は、

Y; スポーツはチームであるよりも個人で

する方がよい

F; スポーツをすればクラスのリリーダーに

なれる

A; 勝たなければスポーツをする価値がない

い

J; スポーツは熟中しすぎるとよくない

I; 子どもがスポーツで外に出ていると手

がかからなくてよい

の5項目であ、たが、項目Yに関して「と

ちらともいえない」と回答する者が約40%を

示していることを考慮に入れなければならな

い。

また、各項目の平均を示したものが図4で

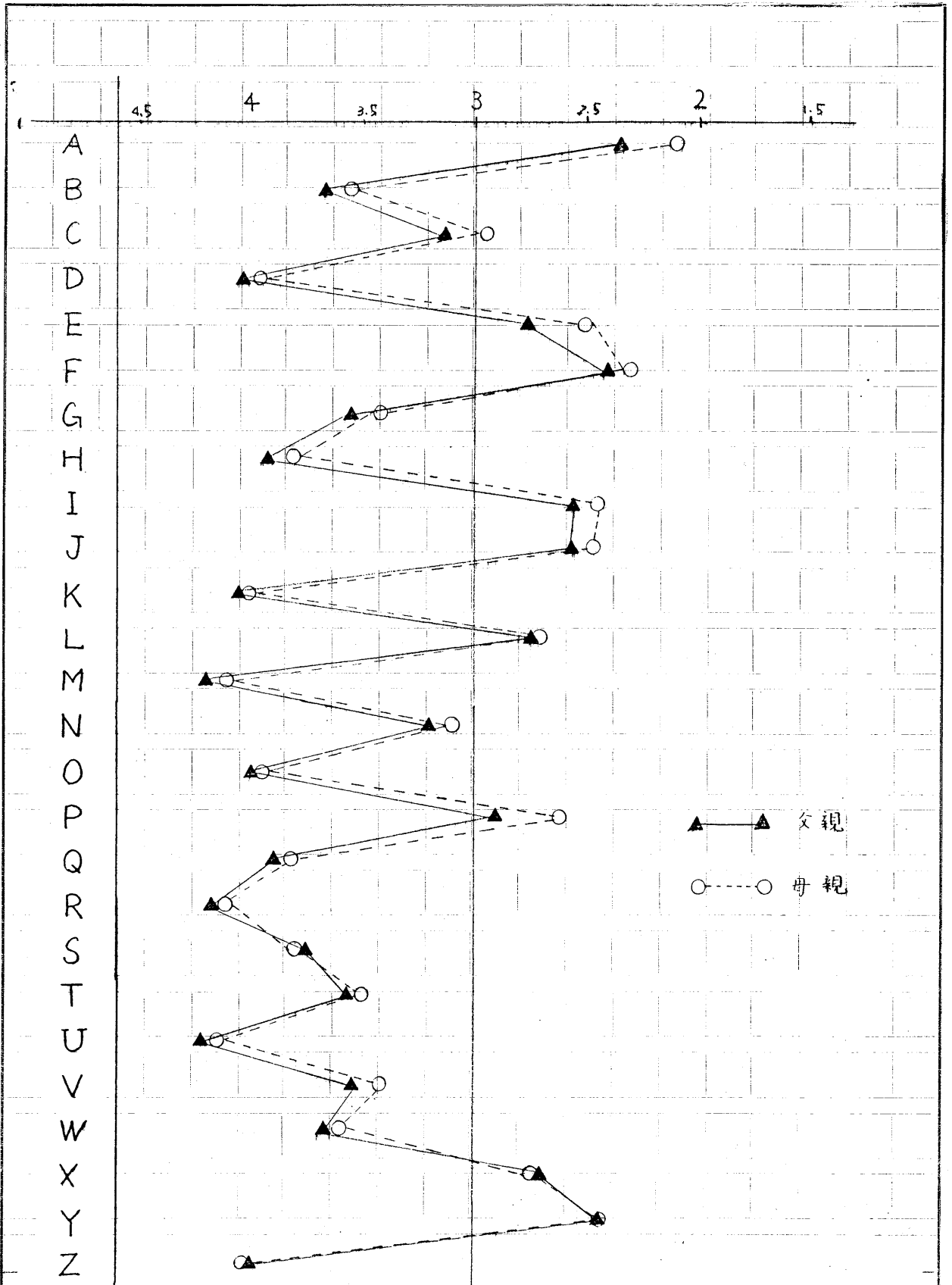


図4 両親のスポーツに対する価値意識項目の平均

ある。この図4から各項目の父親と母親の平均値が全く同じ傾向であるといえる。ただ、項目A、E、Pに関して若干、父親が高いことから、父親の「勝利-大会参加-成績志向」が強いといえよう。これら26項目の中で上位10項目を選択（平均値での上位）するとより一層、支持率の高いスポーツへの価値意識が浮きぼりにされる。それらは、

M；スポーツは現在の健康のためにおい

U；スポーツは将来の体力づくりのためにおい

R；スポーツは将来の健康のためにおい

D；スポーツは個人の人間性を高める

K；スポーツによって精神力がたく

Z；スポーツはストレスの解消に効果的

O；スポーツは望ましい人間関係を築く

H；スポーツをすれば規律ある行動がとれる。

Q；スポーツをすれば団体行動がとれるようになる。

S; スポーツは楽しむことに価値がある  
 の10項目である。以上の項目から、スポーツ  
 における価値として、両親に支持され内在化  
 する価値意識は次に示す6項目としてグルー  
 ピングでまえる。つまり、機能的側面としての

1. 健康(現在、および未来)

2. 体づくり(パワー)

3. 精神力(耐性、ストレス解消)

4. 人間性(ヒューマニティ、規律遵守)

5. 社会性(集団行動、人間関係)

また、スポーツの特性としての

6. 楽しさ

であり、これら6項目は、当該社会および集  
 団の社会的価値(スポーツが持つ性能として  
 の)または、価値志向としても受けとめるこ  
 とができておる。

これとは逆に、平均値の低い項目をあげて  
 みると、

A; 勝たなければスポーツをさす価値がな  
 い

F; スポーツをすればクラスリーダーに  
なれる

Y; スポーツはチームですりも個人で  
する方がよい

I; 子どもがスポーツで外に出ていると手  
がかかるとよい

J; スポーツは熱中しすぎてはよくない

E; スポーツをする限りは大会に出られる  
よう選手にすべきだ

X; スポーツをすることはか、こ良いと思  
う

L; スポーツは子どもたち同志で楽しみが  
よい

P; スポーツをする時は良い記録や良い成  
績をとるべきだ

の9項目が平均値以下の項目としてあげら  
れる。以上の項目から、スポーツにおける価  
値として両親に支持されたい傾向があるもの  
として次に示す6項目が否定的な社会的価  
値、あるいは、価値志向としてあげられる。

表102 父親価値意識項目間順位相関係数行列  $|r| \geq .123$  は  $p < .001$

項	目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z		
A	勝たなければスポーツをする価値が低い																												
B	スポーツ技術を高めさせることが望ましい	.159																											
C	スポーツをすると学校での体育の成績が良くなると思う	.104	.160																										
D	スポーツは個人の人間性を高める	.107	.205	.059																									
E	スポーツをする限りは大会にでられるよう選手になるべきだ	.367	.248	.138	.195																								
F	スポーツをすればクラスのリーダーになれる	.343	.134	.239	.119	.363																							
G	スポーツをすれば運動が得意になる	.136	.203	.300	.139	.207	.214																						
H	スポーツをすれば規律ある行動がとれる	.085	.183	.045	.463	.173	.184	.217																					
I	子どもがスポーツで外にでていると手が届かなくてよい	.042	.061	.182	-.090	.096	.059	.085	-.063																				
J	スポーツは熱中しすぎはよくない	-.013	.060	.071	-.117	-.008	.024	-.023	-.129	.165																			
K	スポーツによって精神力がたく	.071	.205	.103	.334	.183	.137	.218	.354	-.168	-.182																		
L	スポーツは子どもたち同士で楽しめばよい	-.030	-.036	.124	-.158	-.008	.059	.085	-.100	.191	.252	-.108																	
M	スポーツは現在の健康のためによい	-.022	.073	.095	.231	.027	-.011	.162	.208	-.030	-.083	.289	-.111																
N	出費が多くてもスポーツをさせるべきだ	.157	.116	.108	.170	.192	.222	.148	.207	.051	-.135	.162	-.029	.138															
O	スポーツは望ましい人間関係を築く	.086	.193	.122	.456	.164	.144	.154	.355	-.015	-.187	.464	-.058	.276	.217														
P	スポーツをする時は良い記録や良い成績をとるべきだ	.355	.203	.214	.152	.457	.334	.215	.179	.120	-.078	.086	.024	.055	.202	.124													
Q	スポーツをすれば団体行動がとれるようになる	.133	.126	.112	.302	.165	.122	.182	.334	-.038	-.073	.284	-.058	.159	.108	.443	.157												
R	スポーツは将来の健康のためによい	-.035	.066	.135	.239	-.022	.031	.160	.150	-.049	-.103	.283	-.032	.542	.048	.280	.046	.152											
S	スポーツは楽しむことに価値がある	-.160	-.065	.012	-.093	-.152	-.072	.015	-.100	.080	.108	-.055	.182	.128	-.141	-.077	-.161	-.053	.242										
T	スポーツを通して子どもに勝負の喜びを教えたい	.238	.145	.104	.233	.284	.162	.132	.217	.005	-.054	.253	-.015	.155	.123	.256	.286	.230	.167	-.102									
U	スポーツは将来の体力づくりのためによい	-.053	.077	.106	.237	.004	.002	.237	.154	-.021	-.107	.328	-.066	.432	.153	.239	.052	.080	.545	.085	.162								
V	スポーツは個人でするよりもチームでする方がよい	-.024	.060	-.004	.028	.017	.020	.148	.149	.005	-.044	.122	.089	-.011	.020	.104	.028	.204	.079	.130	.152	.114							
W	スポーツをしないと事故防止や安全につながらる	.062	.043	.070	.177	.001	.167	.123	.116	.099	-.003	.132	-.066	.095	.110	.170	.072	.182	.127	-.013	.163	.114	.117						
X	スポーツをすることはかこ良いと思う	.081	.072	.200	.001	.131	.164	.156	.018	.201	.093	.004	.125	.019	.048	.037	.108	.032	.014	.005	.088	.025	.004	.188					
Y	スポーツはチームでするよりも個人でする方がよい	.130	-.010	.114	-.015	-.024	.079	-.039	-.087	.129	.076	-.082	.044	-.054	.085	-.102	.088	-.101	-.083	-.082	-.015	-.060	-.344	.040	.134				
Z	スポーツはストレスの解消になる	-.044	.054	.092	.110	.025	-.016	-.072	.086	.082	-.072	.183	-.076	.214	.025	.114	.019	-.138	.229	.095	.085	.242	.133	.168	.061	-.093			

表103. 母親価値意識項目間順位相関係数行列

\* |r| ≥ .123 は r は S < .001

項目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	
A 勝たなければスポーツをする価値が低い																											
B スポーツ技術を高めさせることが望ましい	.177																										
C スポーツをする学校での体育の成績が良くほると思う	.035	.150																									
D スポーツは個人の人間性を高める	.104	.244	.047																								
E スポーツをする限りは大会に与えられるよう選手になるべきだ	.238	.161	.064	.191																							
F スポーツをすればクラスのリーダーになれる	.166	.122	.307	.088	.233																						
G スポーツをすれば運動が面白いと思わせる	.076	.149	.299	.144	.096	.272																					
H スポーツをすれば規律ある行動がとれる	.107	.027	.044	.352	.150	.126	.241																				
I 子どもがスポーツで外にでていると手が届かなくてよい	.081	.044	.138	-.005	.152	.093	.127	.015																			
J スポーツは熱中しすぎはよくない	.000	-.035	.098	-.102	-.042	.029	.099	-.027	.125																		
K スポーツによって精神力がアップ	.103	.189	.020	.367	.180	.094	.069	.334	-.017	-.166																	
L スポーツは子どもたち同士で楽しむべき	-.009	.028	-.025	-.072	.004	.050	.018	-.059	.109	.158	-.135																
M スポーツは現在の健康のためによい	-.016	.074	.101	.187	.133	.056	.173	.173	.034	-.150	.353	-.144															
N 出費が多くてもスポーツをさせるべきだ	.058	-.024	.099	.086	.138	.151	.118	.187	.131	-.028	.161	.089	.184														
O スポーツは望ましい人間関係を築く	.077	.106	.031	.407	.170	.125	.069	.344	-.035	-.142	.287	-.075	.251	.153													
P スポーツをする時は良い記録や良い成績をとるべきだ	.355	.264	.141	.096	.405	.298	.152	.096	.105	-.002	.113	-.016	.053	.156	.126												
Q スポーツをすれば団体行動がとれるようになる	.088	.020	.062	.223	.185	.116	.111	.329	.015	-.049	.205	-.033	.079	.154	.287	.173											
R スポーツは将来の健康のためによい	.036	.073	.043	.097	.050	.047	.178	.099	.017	-.082	.209	-.065	.367	.119	.156	.125	.181										
S スポーツは楽しむことに価値がある	-.143	-.006	.035	.020	-.080	.021	.060	.077	.102	.005	.089	.133	.171	.048	.087	-.088	.061	.170									
T スポーツを通して子どもに勝負の喜びを教えたい	.113	.156	.077	.156	.169	.113	.083	.112	.060	.023	.138	-.078	.118	.087	.162	.222	.224	.132	-.007								
U スポーツは将来の体力づくりのためによい	.036	.055	.096	.138	.091	.061	.125	.157	.020	-.101	.252	-.086	.417	.151	.266	.073	.152	.627	.080	.197							
V スポーツは個人でするよりもチームでする方がよい	-.024	.034	.080	.013	-.016	.083	.114	.106	-.010	.000	.033	.049	.025	.123	.053	.079	.115	.065	.131	.143	.020						
W スポーツをしないと事故防止や安全につながらる	.043	.051	.146	.094	.051	.122	.192	.094	.061	.026	.035	.009	.106	.072	.150	.066	.120	.209	.070	.112	.154	.109					
X スポーツをすることは良いと思う	.082	.179	.161	.053	.138	.178	.188	.042	.146	.098	.079	-.003	.098	.062	.061	.203	.045	.108	-.001	.126	.118	-.108	.152				
Y スポーツはチームでするよりも個人でする方がよい	.091	.020	.160	-.003	.067	.084	.029	.022	.161	.101	-.001	.089	-.053	.113	-.059	.085	-.015	-.066	.014	.013	-.054	-.260	-.002	.219			
Z スポーツはストレスの解消になる	-.021	.048	.110	.132	.005	.093	.174	.194	.104	-.009	.183	-.005	.190	.105	.162	.099	.117	.197	.228	.079	.136	.114	.234	.111	-.117		



表 104 スポーツは楽しむために  
するものだ (a)

	N	%
そう思う	284	74.9
そう思わない	95	25.1
計	379	100.0

表 105 スポーツをすれば体育の成績  
が上がる (b)

	N	%
そう思う	189	49.9
そう思わない	190	50.1
計	379	100.0

表 106 スポーツをするの仕かによい  
(C)

	N	%
そう思う	107	28.3
そう思わない	271	71.7
計	378	100.0

表 107 スポーツができてるとか入の  
人気者と呼ばれる(d)

	N	%
そう思う	47	12.4
そう思わない	332	87.6
計	379	100.0

表 108 スポーツをするからには勝た  
ほければ意味がない (e)

	N	%
そう思う	123	32.6
そう思わない	254	67.4
計	377	100.0

表 109 スポーツはからだをまたえる  
ためにおこすものだ (f)

	N	%
そう思う	353	93.4
そう思わない	25	6.6
計	378	100.0

表 110 スポーツをするからには大会に出場できる選手にほるべきだ  
(9)

	N	%
そう思う	154	40.7
そう思わない	224	59.3
計	378	100.0

表 111 スポーツができて選手とコーチのリーダーになれる  
(h)

	N	%
そう思う	27	7.2
そう思わない	350	92.8
計	377	100.0

表 112 スポーツは苦しいと感じほう  
かた (i)

	N	%
そう思う	284	75.5
そう思わない	92	24.5
計	376	100.0

表 113 スポーツは心をきたえる  
ためにおこほうかた (j)

	N	%
そう思う	309	81.5
そう思わない	70	18.5
計	379	100.0

これらの結果から両親の場合と同様に、価値への支持率にお、そのグループを試みる。それぞれの項目に対して「そう思う」と回答した者の割合が高い順にあげていくと

f; スポーツはからだをきたえるためにおこほうものだ (93.4%)

j; スポーツは心をきたえるためにおこほうものだ (81.5%)

i; スポーツは苦しむをともほうものだ (75.5%)

a; スポーツは楽しむためにするものだ (74.9%)

b; スポーツをすれば体育の成績があがる (49.9%)

g; スポーツをするからには大会に出場できる選手にほるべきだ (40.7%)

e; スポーツをするからには、勝たなければ意味がほい (32.6%)

c; スポーツをするのほか、こ良い (28.3%)

d ; スポーツがでまるとクラスの人気者になられる (12.4%)

h ; スポーツがでまるとクラスのリーダーになられる (7.2%)

とたり)

ほぼ両親との比較においても類似性をもつているといえる。しかしながら、項目a, b, g, eに関して、子どものもつ価値意識として、対応する両親の項目の支持率を上回る傾向がある。

以上の結果と表14に示す、子どもへのスポーツに対する価値意識項目間の順位相関表から、スポーツに対する価値意識をグループ化すると、次の3項目が高い支持率を裏づけとしてあげられる。(70%以上)

- 1. 身体への鍛練
- 2. 精神への鍛練
- 3. 楽しさ

これらの3項目はそれぞれ両親の価値志向として導き出された。1.健康 2.体力づくり、3.精

表 114 子ども価値意識項目間順位相関係数行列

$|r| \leq .155$  は  $p < .001$

	項 目	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
a	スポーツは楽しむために するものだ										
b	スポーツをすれば体育の 成績が上がる	.088									
c	スポーツをするのは カッコイイ	.176 ***	.221 ***								
d	スポーツができればクラスの 人気者になれる	.089	.169 ***	.333 ***							
e	スポーツをするからには 勝たなければ意味がない	.014	.068	.029	.080						
f	スポーツはからだをきたえる ためにおこほうものだ	.042	.116	.097	-.067	.071					
g	スポーツをするからには大会に 出場できる選手になるべきだ	.035	.155 ***	.183 ***	.096	.363 ***	.048				
h	スポーツができればクラスのリーダー になれる	.065	.114	.146	.242 ***	.115	.074	.062			
i	スポーツは苦しさをとらほう ものだ	.028	.015	-.049	-.009	.005	.172 ***	.010	-.033		
j	スポーツは心をきたえるために おこほうものだ	.116	.012	.088	.055	-.090	.150	.021	-.185 ***	.322 ***	

\*\*\* 0.1%水準で有意な相関あり



神力、6. 繫しすに対応するものとしてとらえることができず。

これとは逆に、否定的な項目としては、その項目の低い支持率を基盤に次のものが選出される。(30%以下)

1. リーダーシップの獲得

2. かっこ良さ

この2項目が、支持されたい価値志向としてとらえることができず。

しかしながら、両親の支持されたい価値志向の項目であった。1. 勝利、2. 大会出場については、その支持率が両親のそれよりも高いことから、子どもの方がより、勝利や大会出場に志向しているといえるであろう。

#### 第4節 スポーツにおける価値の類型

第1章の価値論の検討から、本研究では、見田の提起した、価値の構造的次元と類型を採択し、前節までに導き出された、両親、および子どもとのスポーツの価値意識分析を通してのスポーツにおける価値をとりあげて、

類型化を試みる。

まず、スポーツにおける価値としては、

1. 健康

2. 体カづくり

3. 精神力

4. 人間性

5. 社会性

6. 楽しさ

7. 勝利

8. リーダーシップの獲得

9. 大会出場

10. 成績・記録

11. かっこ良さ

12. 技術

の各項目があげられている。これらの項目について、先の類型化をしていく訳であるが、スポーツにおける価値がそのまま、見田の類型に添うものではないかも知れないことも考えられよう。

(1) 価値の構造的次元と類型

## 1. 健康

健康は、見田の示した価値の構造的次元と類型にしたがえば、社会的パーソナリティウとしてほく自己>本位の価値であり、時間的パーソナリティウからみれば<現在><未来>の両方にかかわり、<幸福>を究極価値とする。「欲求性向」が支配する価値として類型化できよう。

## 2. 体づくり

体づくりは、社会的パーソナリティウからみれば、<自己>本位の価値であり、時間的パーソナリティウからみれば、<未来>にかかわる<利>価値として類型化でき、<幸福>が究極価値として考えられる。

## 3. 精神力

精神力は、社会的パーソナリティウとしてほく自己>本位の価値であり、時間的パーソナリティウとしてほく未来>にかかわる<利>価値として類型化できるが、社会的パーソナリティウが<社会>本位にほりにつれて、<

正 > 価値 と 好り、究極価値 として は < 真 > 価値 と 好る こと が 考 え ら れ る。

#### 4. 人間性

人間性は、社会的 パースペクティヴ から み れ ば < 社会 > 本位の 価値 であり、時間的 パースペクティヴ において は < 現在 > < 未来 > の 両方 にかか る こと から、< 愛 > 価値 から < 正 > 価値 へ と 移行 し、究極価値 として < 善 > が 演繹 でき よう。

5. 社会性は、社会的 パースペクティヴ から み れ ば < 社会 > 本位の 価値 であり、時間的 パースペクティヴ において は < 現在 > < 未来 > の 両方 にかか る こと から、< 愛 > 価値 から < 正 > 価値 へ と 移行 し、究極的 価値 として < 善 > 価値 が 演繹 でき よう。

#### 6. 楽しさ

楽しさは、社会的 パースペクティヴ から み れ ば < 自己 > 本位の 価値 であり、時間的 パースペクティヴ から み れ ば < 現在 > 中心 の もの である こと から、< 快 > 価値 として 類型化 でき

まよう。

## 7. 勝利

勝利は、社会的ペースペクティヴから見れば、<自己>本位の価値であり、時間的ペースペクティヴから見れば、<現在>中心のもので<快>価値として類型化できるが、スポーツにおける勝利は、大会出場、試合や成績記録とも当然かかわってくる。

## 8. リーダーシップの獲得

リーダーシップの獲得は、基本的には、社会的ペースペクティヴの中で<自己>本位の属性とほ子のありか、<社会>本位の性能とも考えられる。時間的ペースペクティヴから見れば、<現在>中心から<未来>中心へとひろが、ていく。つまり、<快><愛>価値から<利><正>価値へ移行し、究極的には、<幸福><善>価値にまで昇華される場合もある。

## 9. 大会出場

大会出場は、時間的ペースペクティヴにお

いと、〈現在〉中心から〈未来〉中心へと拡  
がる価値であり、社会的パースペクティヴか  
らみれば、〈自己〉本位のものである。よっ  
て、〈快〉価値、〈利〉価値の系列に類型化  
されるが、究極的には〈真〉価値とほり以上、  
〈自己〉本位から〈社会〉本位に移行するの  
らば、〈正〉価値としても類型化できる。

### 10. 成績・記録

成績・記録は、大会出場と同様に、時間的  
パースペクティヴにおいては、〈現在〉中心  
から、〈未来〉中心へと拡がり、社会的パ  
ースペクティヴにおいては、〈自己〉本位とし  
てとらえられることができる。しかしほが  
ら、これも、究極的には〈真〉価値として位  
置づけられる以上、〈自己〉本位から、〈社  
会〉本位に移行するのらば、〈正〉価値とし  
ても類型化することもできる。

### 11. かゝこ良さ

かゝこ良さは、究極的価値としてほく美〉  
価値として類型化できる。時間的パースペク

ティウは<現在>中心であり、社会的ペース  
 ペクティウは<自己>本位から、<社会>本  
 位へと拡がり、<快><愛>そして<美>の  
 系列に類型化できる。

## 12. 技術

技術は、時間的ペースペクティウにおいて  
 <未来>中心のもので、社会的ペースペクテ  
 ヲウからみれば、<自己>本位から<社会>  
 本位へと拡がり、<利><正>に類型化でき、  
 究極的には<真>価値として導かれるであ  
 る。

これらのスポーツにおける価値類型を図式  
 化したものが、図5である。図5に示される  
 ように、スポーツにおける価値が、見田の示  
 す、価値の構造的次元と類型に位置づけるこ  
 とができ、単一の形態をとるものから、究極  
 的価値を持つものまで、さまざまの様相を呈  
 している。果たして人がとは、快-苦の基準  
 だけで、スポーツに参加しているのでは無い  
 ことが理解できよう。

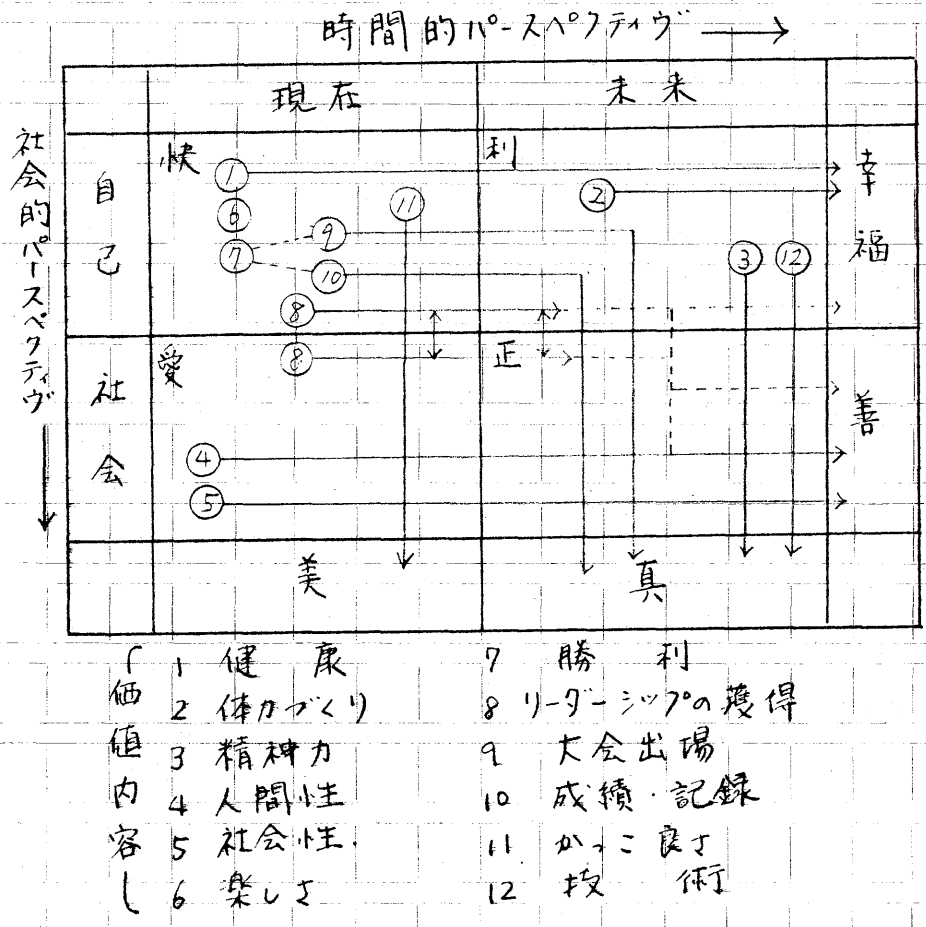


図5 スポーツにおける価値の種類



## 第5節 社会化プロセスと価値

「スポーツへの社会化」のプロセスを、スポーツ参加というkey概念を用いて説明していく立場から、スポーツにおける価値の構造的次元と類型から、前節で分析したさまざまな価値、主体内に内面化した価値を抽出してきた。

これらのスポーツにおける価値は、具体的な行動の方向づけとしての機能を持っている。一般的には、AよりB、というふうな、主体内での選択を生み出すことがあげられる。

そこに、価値によつて、スポーツ参加を呼び起こすという主体側の要因に目を向けた、「スポーツへの社会化」研究の意味があると考えられる。

本節では、社会化の志向性から、子ども→おとなの系列を設定し、意識下にある価値の支持レベルから、不支持→支持(否定→肯定)の系列を設定して、社会化プロセスと価値の問題に論究していく。主体によつて、支持す

れ子価値は、支持されるはい 値よりも、機能  
 としての選抜・方向づけの力を持つているこ  
 とから、子どもからおとほへの発達の過程を  
 通してみると、子どもとおとほのそれぞれに  
 支持される価値の差異が生まれることは容易  
 に推察可能であろう。子どもとおとほのスポ  
 ーツにおける価値の支持傾向を示したものが  
 図6である。

	社会化の方向性		
	子ども	おとほ	
	7, 8才	11, 12才	両親
支持 ↑	楽しさ	体づくり	体づくり
意識	技術	技術 精神力	健康 精神力
下	かっこ良さ	楽しさ	人間性
価値	体づくり	大会出場	社会性
支持		勝利	技術
レベル		かっこ良さ	楽しさ
		リターンシップ	成績記録
			大会出場
			かっこ良さ
			リターンシップ
			勝利
不 支持			

図6. スポーツにおける価値支持の傾向



の蓄積が、おとほのスポーツにおける価値として位置づけられる。

おとほにおける、主体のスポーツ参加を前提とする支持されていり価値の「体カづくり」「健康」「精神力」「人間性」「社会性」などは、自らのスポーツ参加という状況において機能するものと考えられ、最も支持されていり価値の「勝利」は、G. S. ケニョンのいう「二次的参加」の状況下では、おそらく、支持される価値とほるであろう。つまり、自国の選手が勝利は、その国民にとつての「喜び」にほがる<快>価値として捉えることもできるのである。

このように、人びとは、自らの状況によつても、何を目標とするのか異なり、個人の価値意識構造も変容するのである。

## 第6節 個人スポーツとチームスポーツの意識構造

個人スポーツとチームスポーツという、スポーツの特性による参加意識の差異を明らかに

にすゝ意図のもとに、特に個人スポーツとチームスポーツのそれぞれのスポーツクラブ参加には、どのような価値が支持されているのかに対する関心が高けられる。個人スポーツとしての水泳、チームスポーツとしてのサッカー、野球をとりあげ、スポーツクラブ参加の意識構造を示したものが図7である。

		子ども(7,8才)	親
個人スポーツ(水泳)		<ul style="list-style-type: none"> <li>泳げるようになりたい</li> <li>楽しさ</li> <li>おもしろさ</li> <li>親のすすめ</li> <li>水泳が好きだ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康</li> <li>体力</li> <li>精神力</li> <li>泳げるように</li> <li>まわりを守る</li> </ul>
	サッカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>友だちにまきわかれて</li> <li>楽しさ</li> <li>技術</li> <li>サッカーが好きだ</li> <li>かっこ良さ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>協調性</li> <li>健康</li> <li>体力</li> <li>人間性</li> <li>子どもの意志本位</li> </ul>
個人スポーツ(野球)	野球	<ul style="list-style-type: none"> <li>野球が好きだ</li> <li>友だちもやっている</li> <li>楽しさ</li> <li>おもしろさ</li> <li>体をまたえる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康</li> <li>体力</li> <li>協調性</li> <li>子どもの意志本位</li> <li>精神力</li> </ul>

図7. スポーツクラブ参加の意識構造

図7に、意識構造としてあげられた項目は、調査によるスポーツクラブ参加の理由から演繹されたものである。

これによると、子どもについては、個人スポーツとしての水泳のスポーツクラブ参加も、チームスポーツとしてのサッカー・野球のスポーツクラブ参加も、全く同様の意識構造であるといえてよい。親については、チームスポーツの方に、社会性としてとらえられる協調性がある、というだけで、やはりほぼ同様であったといえる。

子どもと親の意識構造は全く異なり、前述した、社会性のプロセスと互持される価値の図式化であり、図6と同様の傾向性を示しているといえよう。しかしながら、ここで、チームスポーツと個人スポーツの性質から自然と表われるであろう意識の差を否定できない点から、今後、コミュニケーションを視点とした分析を行う必要がある。

## 第6章 結 論

スポーツ社会学の分野において、スポーツへの社会化研究は、実際には、スポーツ参加の研究として、取り違われていた事実を批判しつづから、社会学の分野において、今日的イシューとして叫ばれていいる社会化論の再検討の視座に立つ時、そこに、個人の主体の問題がある。従来、叫ばれ続けてきていいるこの「主体」への視点ではある、だが、研究として扱われるには至らないう現状を脱出するために、本研究ではその基調を、主体尊重としての、社会学的インテイク・イズム・アリズムの観点に立、た社会化論に統一しつづければつづらつづらなのである。

そこで、本研究においては、スポーツ参加という「主体」への明確な視点を定め、行為主体としての個人が、まじしくスポーツに、“taking part in”するという方向性を持、た状況において、主体内の選択として捉えることのできる、価値の機能を見逃してはつづらつづら

い。ここに社会化と価値との重要な関係性  
を見い出せるのである。

これは、T.パーソンズ<sup>31)</sup>が、社会体系論を構  
築する上での前提としている「社会化は、価  
値の内面化である」という知見と一致する。

彼自身はこの前提を持ちながらも、社会化を  
社会体系の機能的要件として捉え、没主体の  
構造機能主義的ソサイエタリズムに傾きいて  
いる。社会化にとって重要なのは、個人の内  
面の問題であろう。つまり、この主体の内面  
の問題である「価値」こそが、社会化にとっ  
ての鍵であるといえる。

従来までの研究によって明らかにされてき  
た種々の知見は、スタティックではあるが、  
それ自体の持つ意味は大きい。そこで本研究  
においても、一通りの関連性を確認するた  
めに、スタティックな事実関連を調べている。

特に社会化エージェントを中心に、子ども  
のスポーツ活動を促進するファクターを結果  
考察から導き出している。



これらのファクターは、スポーツ社会学の  
先行研究とほぼ一致している。つまり、性差  
としては、男性の方が、スポーツ活動に参加  
する、あるいは、参加させる影響力が強いこ  
と。年収が多い程、参加への影響力が強いこ  
と。性差とも関連があるが、父親の方がスポ  
ーツ活動への影響力が強いこと。家族内男性  
数が多い程スポーツ活動への影響力が強いこ  
と。まほうたいの影響力は弱い。他律的では  
スポーツ参加は継続性が弱いこと、等であった。  
しかしながら、これらの結論は、やはりスポ  
ーツ参加の問題でしかないのである。

このスポーツへの社会化研究の一領域であ  
る。スポーツ参加の研究が、スポーツへの社  
会化研究と、取り違われているのは、スポ  
ーツへの社会化に対する根本的体系的理解の欠  
如に帰因すると思われる。

本研究においては、あくまでも社会化論を  
展開する訳である。前述した社会化への視座  
から、スポーツにおける価値を分析すること

が研究の独自性でもあり、価値分析の基準として、見田の提起した、価値の構造的次元と類型によつて、スポーツにおける価値特性の分析考察を試みた。

スポーツにおける価値は、調査結果分析のため、次の12項目が演繹された。

1 健康

2 体カづくり

3 精神力

4 人間性

5 社会性

6 楽しさ

7 勝利

8 リーダーシップの獲得

9 大会出場

10 成績・記録

11 かっこ良し

12 技術

これら12項目の価値も、先行研究のそれとオバーラップするものがあるが、その特性

を、時間的パーソパクテイヴとしての〈現在〉中心、〈未来〉中心の2類型、また、社会的パーソパクテイヴとしての〈自己〉本位・〈社会〉本位の2類型、つまり $2 \times 2 = 4$ 類型に求めた。〈快〉〈利〉〈愛〉〈正〉という価値の構造的次元での類型化は結果として、単一のカテゴリーに属するものから、究極価値としての〈幸福〉〈美〉〈善〉〈真〉までに昇華するものまで了了了了であった。(ノルヘージ, 図5)

そして、これらのスポーツにおける価値を内面化する過程が社会化であることから、社会化過程においては、支持される価値と支持されない価値とがあり、前者を、子ども→おとなの基準に則して考察を可及、導びかれた差異は、以下の通りであった。

子どもに支持される価値は、おとなには支持されない傾向があり、おとなは、子どもとは別な価値を支持する傾向が強まる。これらは、社会化のプロセスにおける、スポーツ参

加にとともほう「価値剝奪」「価値付与」の過程でもあり。また、子どもが内面化している価値は、スポーツ自体の属性であり、おとほのそれと比べ、ひじほうに、自己の感覚や感情にかかわり、かつ事実確認が容易であるといえるものであり、た。一方、おとほが支持する価値は、その概念が、スポーツを超えて、究極的お人間存在にかかわり望まれているであり抽象的理念的のものである。

また個人スポーツとチームスポーツの基準から、子どもとおとほにおける同様の傾向があり、ただ、スポーツの形態からの差異はおとほにだけみられ、チームスポーツにおいて社会性という価値が、スポーツクラブ参加にとともほう意識構造に出現するにととも、た。

以上のよう示される、おとほと子どもの価値意識の差異を世代差、もしくは、社会化の程度のちがいによるものとして捉えることができるが、より精緻な研究をすすめるのた

らば、生活周期 (Life cycle) を基準に明らかにする方向性があげられよう。

これまで述べた諸結果に関連して、指導行動の場において、どのようなスポーツにおける価値の提供がより、スポーツ参加を促進するかという問題に論究したい。

子どもへのスポーツに対する価値意識が、おとなのそれと比べて、自己の感覚や感情に関与するもので、事実確認がしやすいことから、子どもに対する指導時には、

1. いかにか、子どもの感覚に合致した指導内容があるか。

2. いかにか、事実確認が容易である内容か。といふ点に留意しなくてはならない。といえよう。これらをふまれば、スポーツ参加は促進されるであろう。つまり、スポーツ指導の場において、指導者が、子どもの関心領域に対して、スポーツをいかにか、魅力あるものとして写せるかという問題であろう。そこで、スポーツの魅力は、本研究での結論とすると、

より、子どもの感覚に合致し、事実確認の容易さ、という性質をもったものでなくてはならない。

また一方、おとほのスポーツに対する価値意識から、指導行動の場面において、

1. いかに関念的にスポーツ参加行動を導くか。

という問題を、指導者が認識し、指導内容に含めなければならぬ、といえよう。つまり、指導行動時において、理念的なコミュニケーションによって、参加を促進することができると考えられるのである。

これらの結論から、スポーツにおける指導行動や組織づくりに応用できる知見としては、人間の発達に応じた、スポーツにおける価値の提供を、指導者が行ほう二とにより、スポーツ参加を促進させる方法の一つとして、指導内容に己含していかねばならないことが提起されよう。

人々が、何を求めて、スポーツに参加して

いくのかに関する。「スポーツへの社会化」の問題は、参加行為の体系的理解の基礎的要件である。スポーツにおける価値の問題にまで、フィードバックする必要性を再確認するものである。本研究では、やはり、これらの体系的理解の第一段階としての役割しか担ってはいけないのかも知れない。

今後の課題としては、前述の子どもから、成人、老人に至る、ライフサイクルに応じたスポーツにおける社会化を考究していく実証的研究、また、時代変化に伴う価値観（社会的価値意識）の変容とスポーツにおける価値の分析、などを基盤にしていかなくてはならない。又、チームスポーツと個人スポーツにおける価値意識の差異も、おそらく、参加者のあいだのコミュニケーションが関与するものと考えられる以上、十分に考究していかなくてはならないだろう。

## 第7章 要 約

本研究は、人がスポーツにどのようなメカニズムで参加していくのか、という問題とされる「スポーツにおける社会化」研究である。

近年、社会学の分野においても強調されてきた「主体性」に立脚した社会化論を展開するために、スポーツにおける参加行為に焦点を置き、何故、人がスポーツに参加するのかという問題を体系的に理解することを目的としている。

ところが、スポーツ社会学の分野では、「スポーツにおける社会化」研究の一領域である「スポーツ参加」の研究が、「スポーツへの社会化」研究として、とり違われ、論理的に飛躍してしまっている。

さて、社会化を価値の内面化の過程とする限り、「スポーツへの社会化」は、「スポーツにおける価値」の内面化の過程として捉えることが可能である。

以上の点から、本研究では、「スポーツへ



の社会化」のプロセスを明らかにするために、人が何故スポーツに参加するのか、という問題を、参加という意識的行爲を方向づけた。社会化の資質内容としての「価値」を明らかにすることから分析しようとした。

以上の視座から、次にあげることから、調査結果からの考察で結論づけられた。

1) 人は、スポーツに対して、その社会化の過程で、健康、体づくり、精神力、人間性、楽しさ、勝利、社会性、リーダーシップの獲得、大会出場、成績・記録技術、か、こ良さ等の価値を認識している。

2) スポーツにおける価値にも、支持・不支持の系列があり、子どもの支持する価値は、感情的、感覚的であり、スポーツそのものの属性であり、事実確認が容易なものであった。

3) おとなの支持する価値は、子どもと異なり、理念的、抽象的であり、人

間存在に関わる究極的盼望をもちたであ  
た。

4) チームスポーツと個人スポーツとの参加  
にみられる意識構造の差はない。

5) スポーツ参加を促進させる指導場面の方  
途として、2)、3)の結論が応用できる。

今後より深くこの「スポーツにおける社会  
化」を研究してゆくには、生活周期との関連  
性、および、時代の変化による価値観(社会  
的価値意識)の変容に視角を広げる必要があ  
らう。

## 謝 辞

本研究を、修士論文として提出するにあたり、論文完成までに、多大なる御示唆を賜った各先生方に心から感謝の意を表します。

齊藤定雄教授には、論文指導教員として、また、北村薫助手にも、研究の初段階から論文の完成までに関わり、適時、御指導をいただき、研究の核心に至る専門的知見を提供していただいた。

論文の審査にあたり、主査として、体育学部長、高橋亮三教授、副査として、山本武彦教授、南谷和利助教授の各先生方には、厳正かつ重要な御示唆をいただいた。

調査時においては、順天堂大学社会学研究室のセミナー員、村田昌俊、小山克彦、鈴木和広、の各学兄に大変お世話には、下。また、愛媛大学、藤原誠先生、滋賀大学、沢田和明助教授には、陰ながら、御助力をしてく

だす。た。

本研究は、学部3年の時から自らの関心領域に対する、解答の一段階ではあるが、「社会化」問題の奥の深さと、「スポーツにおける価値」問題の体系的理解の困難さは、今後、我々が、少しずつではあるが、前進していかねばならない課題であろう。

1981年2月13日

順天堂大学大学院

社会学研究室

太田雅夫

## 引用文献

- 1 ) Allport, G.W.: *Becoming*, Yale Univ. Press: New Haven (1955), 豊沢登記: 人間<sup>a</sup>形成, 第1版, 166~173, 理想社: 東京(1979)
- 2 ) Allport, G.W.: *The Historical Background of Social Psychology*, In Lindzey ed.: *Handbook of Social Psychology* (1954), 見田宗介: 価値意識の理論, 第12版, 20~23, 弘文堂: 東京(1979)より引用
- 3 ) Bell, J.W.: *A Proper Hierachy of Values*, *The Physical Educator* 28 - (3), 146 (1971) 三本松正敏: スポーツの価値に関する社会学的研究序説, 体育社会学研究会編: スポーツ行動の文化社会学的基礎 第1版, 25~40, 道和書院: 東京(1979)より引用
- 4 ) Caillouis, R.: *Les Jeux et Les Hommes*, 1st ed. Editions Gallimard: Paris (1958), 多田道太郎・塚崎幹夫訳: 遊心と人間,

第1版, 30~41, 講談社: 東京(1973)

5) Caillois, R. 同上, 42~80

6) Caillois, R. 前掲書, 81~87

7) Child, I.L.: Socialization, In Lindzey, G. ed.  
Handbook of social psychology, 1st.ed. 655~692  
Addison - Wesley: Cambridge. Mass. (1954)

菊池章夫、斎藤耕二編著: 社会化の心理学,  
第1版, 1~12, 川島書店: 東京(1974)より

引用

8) Durkeim, É.: Éducation ET Sociologie,

Félix Alcan: Paris (1922), 佐々木文賢訳  
: 教育と社会学, 第1版, 8, 誠信書  
房: 東京(1976)

9) Elkin, F.: The child and society - the process  
of socialization. Random House: New York (1960)

菊池章夫、斎藤耕二編著: 社会化の心  
理学, 第1版, 1~12, 川島書店: 東京  
(1974)より引用

10) Fromm, E.: Escape from freedom 1st ed.:

New York (1941), 日高六郎訳: 自由の

りの逃走, 第79版, 10~31, 東京創元社: 東京(1980)

11) 藤原健固: スポーツと社会化, 第1版, 道和書院: 東京(1976)

12) Huizinga, J.: Homo Ludens, 1st ed, (1938) 高橋英夫訳: ホモ・ルーデンス - 人類文化と遊戯, 第15版, 24~25, 中央公論社: 東京(1971)

13) 嘉戸修, 永島惇正, 川辺光, 萩原美代子, 加藤爽子: 直接的スポーツ関与の分析とその要因に関する研究, 体育社会学研究会編: スポーツ参加の社会学, 第1版, 25~54, 道和書院: 東京(1977)

14) 影山健, 今村浩明, 佐伯聰夫: スポーツ参加の社会学について, 体育社会学研究会編: スポーツ参加の社会学, 第1版, 1~23, 道和書院: 東京(1977)

15) 上杉正幸: スポーツ価値意識論の方向性, 体育社会学研究会編: スポーツ参加の社会学, 第1版, 193~211, 道和

書院：東京（1977）

16) Kenyon, G.S.: Sport Involvement in Kenyon  
ed.: Sociology of Sport, 1st ed. 77~84,  
The Athletic Institute: Chicago (1969)

17) Kluckhohn, C. and Murray, A.: Personality  
in Nature, Society and Culture, 1st ed. 11,  
(1953), 見田宗介著：価値意識の理  
論、第12版、20~23, 弘文堂：東京  
(1979)より引用

18) Kluckhohn, C.: Value - Orientations in the  
Theory of Action. In Parsons, T and Shils, E ed.  
: Toward a General Theory of Action, 1st ed.  
390, Harvard Univ. Press: U.S.A., 見田宗  
介著：価値意識の理論、第12版、20~  
30, 弘文堂：東京（1979）より引用

19) Larson, L.A.: Why Sports Participation,  
JOPER 35-(1) 36~43 (1964), 三本松正  
敏：スポーツの価値に関する社会学的  
研究序説、体育社会学研究会編：スポーツ  
行動の文化社会学的基礎、第1版、25



~ 40, 道和書院: 東京 (1979) 5) 引  
用.

20) Linton, R.: The Cultural Background of Personality, 1st ed. Appleton - Century - Crofts: New York (1945), 清水幾太郎. 大養康彦共訳: 文化人類学入門, 第27版, 139, 東京創元社: 東京 (1977)

21) Loy, J. W. and McPherson and Kenyon, G. S.: Sport and Social system, 1st ed. 215 ~ 255, Addison - wesley Publishing Company: Calif. (1978)

22) 前川峯雄: 体育原理, 現代保健体育学大系1. 第9版, 160 ~ 195, 大修館書店: 東京 (1970)

23) 牧口常三郎: 価値論, 戸田城聖補討, 第1版, 21 ~ 27, 第三文明社: 東京 (1979)

24) McNeil, E. B.: Human socialization, Brooks/Cole: Belmont, Calif. (1969), 菊池章夫. 斎藤耕二編著: 社会化と心理学; 第1版,

1~12, 川島書店: 東京 (1974) 5) 引用.

25) 見田宗介: 価値意識の理論, 第12版, 14~24, 弘文堂: 東京 (1979)

26) 見田宗介: 同上, 25~36

27) Muller, J. H.: Human Values in Relation to Evolution, Science (21) Mar. (1958), 尾形健一郎訳: 進化との関係における人間価値観, アメリカナ (2), 70, (1959) 見田宗介著: 価値意識の理論, 第12版, 20~23, 弘文堂: 東京 (1979) 5) 引用

28) Mussen, P. H.: Early Socialization - learning and identification, In Mandler, G. et al. ed. New directions in Psychology III, Holt, Rinehart and Winston: New York, 菊池章夫・斎藤耕二編著: 社会化の心理学, 第1版, 1~12, 川島書店: 東京 (1974) 5) 引用

29) Parsons, T. and Bales, R. F.: Family - Socialization and Interaction Process,

Routledge and Kegan Paul : New York (1956)

橋本真雄、溝口謙三、高木正太郎、武藤孝典、山村賢明訳：核家族と子どもの社会化。上・下。第1版、黎明書房：東京（1971）

30) Parsons, T. and Shils, E. A. : Toward a General Theory of Action (1954), 永井道雄・作田啓一、橋本真英訳 第1版、380~381, 日本評論社：東京（1960）

31) Parsons, T. : The Social System, 1st ed. 12, (1951), 見田宗介：価値意識の理論 第12版、22~23, 弘文堂：東京（1979）より引用

32) 有藤定雄：現代社会とスポーツ, 石河利寛・有藤定雄編：社会体育指導者ハンドブック, 第1版, 14~16, フォルサム社：東京（1980）

33) 三本松正敏：スポーツの価値に関する社会学的研究序説, 体育社会学研究会編：スポーツ行動の文化社会学的基礎,

第1版, 25~40, 道和書院: 東京(1979)

34) 柴野昌山: 社会化論の再検討, 社会学評論 107. 第29卷. 第3号, 19~34, 有斐閣: 東京(1977)

35) Snyder, E. E. and Spreitzer, E.: Social aspects of Sport, 1st. ed., 23~38, Prentice-Hall Inc., Englewood Cliffs: New Jersey (1978)

36) Snyder, E. E. and Spreitzer, E. 同上, 54~69.

37) Vanderzwarng, H. J.: Toward a Philosophy of Sport, 1st ed. 144~158. 三本松正敏: スポーツの価値に関する社会学的研究序説, 体育社会学研究会編: スポーツ行動の文化社会学的基础, 第1版, 25~40, 道和書院: 東京(1979)より引用

38) Zigler, E. and Child: Socialization, In Lindzey, G. and Aronson, E. ed.: The handbook of social psychology 2nd ed. Vol. 2, 450~529, Addison-Wesley: Cambridge

Mass. : London (1969), 菊池章夫、有藤  
耕二編著 : 社会化の心理学, 第1版,  
1~12, 川島書店 : 東京 (1974) より  
引用.

## SUMMARY

Masao OHTA

In recent years, " Sport involvement " is criticized by some students of sport sociology. But, their studies are not sufficient to understand the system of sport participation in a point of view of " Sport socialization ".

The purpose of this study is to understand the system on " Sport involvement ", especially " Sport participation ". In order to obtain systematic understanding, we focused on " Sport socialization " which is defined as a process of internalization of " Sport values ".

Consequently, values on sport must be explained at first. So two researches are designed for analysing values on sport. Respondents are asked about their sport involvement and their own value consciousness on sport. Values on sport were summarized as follows;

- A) Health
- B) Physical fitness
- C) Mental fitness
- D) Humanity
- E) Sociability
- F) Pleasure
- G) Triumph
- H) Leader ship
- I) Contestant
- J) Result and record
- K) Smartness
- L) Skill

471 samples of reseach I were selected from swimming school at University of Juntendo on July. This swimming school was

held for children who wanted to be able to swim. Research I was sampling from children and their parents there.

Research II was sampling 381 cases from 5th and 6th grade pupils in Yashiki elementary school ( Narashino city ) on November.

Findings;

- 1) Men were more positively involved in sport than women.
- 2) Children who participated in sport were affected by fathers rather than by mothers.
- 3) The higher the male rate in a family is, the greater children's sport participation is.
- 4) Sport participation of family members depended on family income.
- 5) Subjectivity of participants is requisite to children's durative sport participation.
- 6) The values F,L,K,G and I were more accepted by children rather than by parents.
- 7) The values B,A,C,D and E were more accepted by parents.
- 8) There was no difference of value consciousness between Team sport participants and Individual sport participants.

Discuss;

Findings 1) to 5) have already noted in several studies. These are acceptable commonly. However these are insufficient to explain sport socialization.

Findings 6) and 7) are directly related to sport socialization. From these findings, it is clearly that children's value consciousness is sensitive, visible and active, on the other hand, parents' value consciousness is ideal and humanized. On sport instruction, these differences must be known by sport leaders. So sport participants will be durable and they will be able to enjoy sport themselves.

In order to understand the process of sport socialization, values on sport will have to study from a view point of life cycle from now on.

Though there is no difference on this finding, the difference of value consciousness between Team sport participants and Individual sport participants must be clarified in a point of view of their communication networks.

January 1981



児童のスポーツ行動に関する調査

本調査は、子どもたちの日常生活におけるスポーツ行動を、親子  
きょうだいの関係からそのあり方を分析し、今後の子どもたちの  
スポーツ行動に役立てる意図で行われたものです。集計にあたり  
ては、すべて数字にしておし大型コンピュータにより一括した統計  
処理をいたします。個人的に御迷惑がかかることは一切ありません  
ので、できるだけ詳しくありのままにお答えくださいますようお願い  
申し上げます。私運の意中をご賢察頂まご協力くださるようお願い  
いたします。 1980年7月

順天堂大学社会学研究室

尚、提出は水泳教室の最終日までにお願いたします。

《項目》

(1)本人の氏名 \_\_\_\_\_, 年令 \_\_\_\_\_ 才, 性別 1.男 2.女  
学校名 \_\_\_\_\_, 学年 \_\_\_\_\_ 年

〈本人のスポーツ参加〉(お母様が本人によく確かめて記入してください)

(1)現在、学校のクラブでスポーツをしていますか。  
1.している 2.していない  
↳ その種目( )、練習回数週に( )回  
練習時間1回当り( )時間  
どんな理由や目的で学校のクラブでスポーツをやっているのか  
( )

(2)現在、学校以外のどこかのスポーツクラブに加入していますか  
1.加入している 2.加入していない  
↳ クラブの名称( )、種目( )  
練習回数週に( )回、時間1回当り( )時間  
会費、月に( )円  
入会してから何カ月たちますか( )カ月  
何人の指導者について練習していますか( )人  
本人の加入した理由を率直におまかせください  
( )

親の加入させた理由を率直におまかせください  
( )

(3) (2)のクラブに入る前に、どこかのスポーツクラブに入っていた  
ことはありますか

1.ある 2.はない  
↳ クラブの名称( )、種目( )  
練習回数週に( )回、時間1回当り( )時間  
会費、月に( )円、入会していた期間( )カ月  
いくつの時に入会しましたか( )才の時  
何人の指導者について練習していましたか( )人  
どんなことからやめることになりましたか、その理由をおまかせください。  
( )

(4)現在、(1)の学校と(2)のスポーツクラブのほかにも、自分で定期的に、  
(週1回以上)行っているスポーツがありますか

1.ある 2.はない  
↳ その種目( )、練習回数週に( )回  
練習時間1回当り( )時間  
何人のグループで行っていますか( )人  
どんな理由や目的でこのスポーツを行っているのか。  
( )

(5)お母様は、お子さんがスポーツをする時に励ましの言葉をかけたことが  
ありますか。

1.良くある 2.たまにある 3.特に言わない  
↳ どのような時ですか( )  
↳ どのような言葉をかけられましたか詳しく御記入ください。  
( )

(6)お父様は、お子さんがスポーツをする時に励ましの言葉をかけたことが  
ありますか。

1.良くある 2.たまにある 3.特に言わない  
↳ どのような時ですか( )  
↳ どのような言葉をかけられましたか詳しく御記入ください。  
( )



(4)現在なまっているスポーツがありますか。

父親 母親  
 1.ある 2.ない 1.ある 2.ない  
 ↳種目 { 1. 2. } ↳種目 { 1. 2. }  
 どんな理由や目的でスポーツをなましているのか理由をお聞かせください。  
 (父親) (母親)

(5)現在お子さんと一緒になまっているスポーツがありますか。

父親 母親  
 1.ある → その種目( ) 1.ある → その種目( )  
 ↳スポーツをしていて良かったと思う点や悪いと思った点を自由におなまください。  
 (良かった点) (良かった点)  
 (悪かった点) (悪かった点)  
 2.ない 2.ない  
 ↳していない或いはほごまない理由をおなまください。  
 (父親) (母親)

<きょうだいのスポーツ参加>

本人のすぐ上のきょうだいとすぐ下のきょうだいのお子さんについて御記入ください。

(1)すぐ上のきょうだい → 1.いる 2.いない  
 ↳性別 1.男 2.女 何才上ですか。 \_\_\_\_才  
 ↳現在スポーツを定期的にく(週1回以上)していますか。  
 1.している 2.していない  
 ↳種目( ) 練習回数 週にく( )回  
 練習時間/回当り( )時間. 始めてく( )ヵ月  
 どんな理由や目的でスポーツを定期的にやっていますのですか。  
 ( )

(2)すぐ下のきょうだい 1.いる 2.いない  
 ↳性別 1.男 2.女 何才下ですか。 \_\_\_\_才  
 ↳現在スポーツを定期的にく(週1回以上)していますか。  
 1.している 2.していない  
 ↳種目( ) 練習回数 週にく( )回  
 練習時間/回当り( )時間. 始めてく( )ヵ月  
 どんな理由や目的でスポーツを定期的にやっていますのですか。  
 ( )

<家族について>

(1)家族内でスポーツについて話をすることがあるとと思いますが、どのような事が話題になりますか。いくつでもおなまください。

[ ]

(2)家族構成員についてく同居者全員について御記入ください。

氏名	続柄	学年	性別	職業(おまだけかく)・学校名	学年
1					
2					
3					
4					
5					
6					
7					
8					
9					
10					

(3)住居 1.持家 2.マンション 3.借家 4.団地 5.アパート 6.その他  
 (4)居住して何年にひりますか。 \_\_\_\_年  
 (5)年収は 1. 200万円以内 2. 201~300万 3. 301~400万  
 4. 401~500万 5. 501~600万 6. 601~700万 7. 701万以上

御多忙中にもかかわらず御協力ありがとうございました。

屋敷小学校5・6年生のスポーツに関する調査  
昭和55年 月 日  
順天堂大学社会学研究室

この調査は日ごろみなさんがどのような考えでスポーツをおこなっているかをみようとするものです。みなさんの答えは全部数字におきかえてしまいますので、だれがどのように答えたかわからないようになります。ですから、まわりの人と相談をしないで正直に答えてください。

年 組 氏名 男 女 (○でかこむ)

1) あなたは学校の体育の授業が好きですか、きらいですか。あてはまる番号に○をつけてください。

1. 好き
2. きらい

(1に○をつけた人だけ答えてください)あなたはなぜ体育の授業が好きなのですか。次のなかから自分の気持ちに一番ちかいものをえらび○をつけてください。(1つだけ)

1. 他の授業より楽しいから
2. 先生の指導がよいから
3. からだを思いきり動かせるから
4. 運動がじょうずになるから
5. 運動ができた時先生や友だちにほめられるから
6. できない運動ができるようになったから
7. その他( )

(2に○をつけた人だけ答えてください)あなたはなぜ体育の授業がきらいなのですか。次のなかから自分の気持ちに一番ちかいものをえらび○をつけてください。(1つだけ)

1. 他の授業の方が楽しいから
2. 先生にしかられたから
3. つかれるのがいやだから
4. 運動がにがてだから
5. 失敗して笑われたりするのいやだから
6. 体育の時間にケガをしたから
7. その他( )

2) あなたは学校の運動クラブでスポーツをしていますか。あてはまる番号に○をつけてください。

1. している (1と2に○をつけた人だけ答えてください)
2. 以前していたが今はしていない その種目
3. 今までしたことがない 練習回数 週に 日

練習時間 1日に 時間 分

(1に○をつけた人だけ答えてください)あなたが運動クラブでスポーツをしているのはなぜですか。自分の気持ちに一番近いものに○をつけてください。(1つだけ)

1. クラブの種目が好きだから
2. その種目がうまくなりたいたいから
3. 体育の成績を上げたいから
4. その種目がはやっているから
5. からだをじょうぶにしたいから
6. コーチの先生が好きだから
7. 友だちをつくりたいから
8. その他( )

(1に○をつけた人だけ答えてください)あなたは運動クラブの時間をまちどろしいと思っっていますか。あてはまる番号に○をつけてください。

1. まちどろしいと思う
2. まちどろしいと思わない

(2に○をつけた人だけ答えてください)あなたはなぜ運動クラブをやめたのですか。自分の気持ちに一番近いものに○をつけてください。(1つだけ)

1. クラブ活動がおもしろくなかったから
2. 学校の成績が下がったから
3. うまくならなかったから
4. 練習がたつらくなってついていけなかったから
5. じゅくやおけいこ事でいそがしいから
6. 医者にとめられたから
7. コーチの先生がきらいだから
8. ケガをしたから
9. 親に反対されたから
10. その他( )

(3に○をつけた人だけ答えてください)あなたはなぜ運動クラブに参加しないのですか。自分の気持ちに一番近いものに○をつけてください。(1つだけ)

1. 運動がきらいだから
2. 文化クラブの方が好きだから
3. 運動がにがてだから
4. 医者にとめられているから
5. じゅくやおけいこ事でいそがしいから
6. 運動で人にばかりにされるのがいやだから
7. 親が反対するから
8. その他( )

3) あなたは学校以外のスポーツクラブやチームでスポーツをしていますか。あてはまる番号に○をつけてください。

1. している
2. 以前していたが今はしていない
3. 今までしたことがない

(1と2に○をつけた人だけ次のらんに入力してください)  
今参加しているクラブ・チームについて(今しているものを全部)

クラブ・チーム名	種目	練習回数	練習時間
		月に( )日	1回( )時間( )分
		月に( )日	1回( )時間( )分
		月に( )日	1回( )時間( )分

これまで参加したことがあるものを全部書いてください

クラブ・チーム名	種目	練習回数	練習時間
		月に( )日	1回( )時間( )分
		月に( )日	1回( )時間( )分
		月に( )日	1回( )時間( )分
		月に( )日	1回( )時間( )分

(1に○をつけた人だけ答えてください)あなたはなぜそこでスポーツをしているのですか。自分の気持ちに一番近いものに○をつけてください。(1つだけ)

1. その種目が好きだから
2. その種目がうまくなりたいたいから
3. 体育の成績を上げたいから
4. はやっているスポーツだから
5. からだをじょうぶにしたいから
6. コーチが好きだから
7. 友だちをつくりたいから
8. 学校ではできないスポーツだから
9. 学校でするスポーツだけでは不足だから
10. その他( )

→(2に○をつけた人だけ答えてください)あなたはなぜそのクラブ・チームをやめたのですか。自分の気持ちに一番近いものに○をつけてください。(1つだけ)

1. そこでの活動がおもしろくなかったから
2. 学校の成績が下がったから
3. 運動がうまくならなかったから
4. 練習がつかなくてついていけなかったから
5. じゅくやおけいご事でいそがしいから
6. 医者にとめられたから
7. コーチがきらいだから
8. ケガをしたから
9. 親に反対されたから
10. お金がかかりすぎたから
11. その他( )

→(3に○をつけた人だけ答えてください)あなたはなぜスポーツのクラブやチームに参加しないのですか。自分の気持ちに一番近いものに○をつけてください。(1つだけ)

1. 運動がきらいだから
2. 学校でしているのでじゅうぶんだから
3. 運動かたがでだから
4. 医者にとめられているから
5. じゅくやおけいご事でいそがしいから
6. 運動で人にばかにされるのがいやだから
7. 親が反対するから
8. クラブやチームにどうすれば入れるのかわからないから
9. その他( )

→(1に○をつけた人だけ答えてください)あなたはだれにすすめられて運動クラブに参加しましたか。あてはまる番号に○をつけてください。(1つだけ)

1. 父にすすめられて
2. 母にすすめられて
3. きょうだいにすすめられて
4. 学校の先生にすすめられて
5. だれにもすすめられずに自分からすすんで
6. その他( )

(2に○をつけた人だけ答えてください)あなたはだれにすすめられてそのクラブやチームに参加しましたか。あてはまる番号に○をつけてください。(1つだけ)

1. 父にすすめられて
2. 母にすすめられて
3. きょうだいにすすめられて
4. 学校の先生にすすめられて
5. だれにもすすめられずに自分からすすんで
6. その他( )

4) 次に6つの質問があります。それぞれについてあてはまる番号に1つだけ○をつけてください。

- |   |                     |           |            |         |
|---|---------------------|-----------|------------|---------|
| a | テレビのスポーツ番組をみますか     | 1. よくみる   | 2. たまにみる   | 3. みない  |
| b | 新聞のスポーツ欄をみますか       | 1. よくみる   | 2. たまにみる   | 3. みない  |
| c | スポーツについての本や雑誌をよみますか | 1. よくよむ   | 2. たまによむ   | 3. よまない |
| d | スポーツについてのまんがをみますか   | 1. よくみる   | 2. たまにみる   | 3. みない  |
| e | スポーツについての会話をしますか    | 1. よくする   | 2. たまにする   | 3. しない  |
| f | スポーツの大会や試合をみにいきますか  | 1. よくみにいく | 2. たまにみにいく | 3. いかない |

5) 次に10の意見があります。あなたの考えに近い方の番号に○をつけてください。

- |   |                             |         |           |
|---|-----------------------------|---------|-----------|
| a | スポーツは楽しむためにするものだ            | 1. そう思う | 2. そう思わない |
| b | スポーツをすれば体育の成績が上がる           | 1. そう思う | 2. そう思わない |
| c | スポーツをするのはカッコイイ              | 1. そう思う | 2. そう思わない |
| d | スポーツができるとクラスの人気者になれる        | 1. そう思う | 2. そう思わない |
| e | スポーツをするからには勝たなければ意味がない      | 1. そう思う | 2. そう思わない |
| f | スポーツはからだをきたえるためにおこなうものだ     | 1. そう思う | 2. そう思わない |
| g | スポーツをするからには大会に出場できる選手になるべきだ | 1. そう思う | 2. そう思わない |
| h | スポーツができるとクラスのリーダーになれる       | 1. そう思う | 2. そう思わない |
| i | スポーツは苦しさをとまなうものだ            | 1. そう思う | 2. そう思わない |
| j | スポーツは心をきたえるためにおこなうものだ       | 1. そう思う | 2. そう思わない |

6) 学校の運動クラブに入っている人だけ答えてください。運動クラブをしていて日ごろあなたが考えていることに一番近い番号に○をつけてください。

- |   |                 |           |            |          |
|---|-----------------|-----------|------------|----------|
| a | 運動クラブで使うしせつや用くに | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| b | コーチの先生のおしえ方に    | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| c | 運動クラブの時間の長さに    | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| d | 運動クラブでからだを動かす量に | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| e | 運動クラブの時間は       | 1. 長すぎる   | 2. ちょうどよい  | 3. 短かすぎる |
| f | 運動クラブでからだを動かす量は | 1. 多すぎる   | 2. ちょうどよい  | 3. 少なすぎる |

7) 学校以外のスポーツクラブやチームに入っている人だけ答えてください。クラブやチームに参加して日ごろあなたが考えていることに一番近い番号に○をつけてください。

- |   |                   |           |            |          |
|---|-------------------|-----------|------------|----------|
| a | クラブやチームで使うしせつや用くに | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| b | コーチのおしえ方に         | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| c | クラブ・チームの活動時間の長さに  | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| d | クラブ・チームでからだを動かす量に | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| e | クラブ・チームの活動時間は     | 1. 長すぎる   | 2. ちょうどよい  | 3. 短かすぎる |
| f | クラブ・チームでからだを動かす量は | 1. 多すぎる   | 2. ちょうどよい  | 3. 少なすぎる |

8) みなさん全員が答えてください。学校で体育の授業を受けていて日ごろあなたが考えていることに一番近い番号に○をつけてください。

- |   |                    |           |            |          |
|---|--------------------|-----------|------------|----------|
| a | 体操の授業に             | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| b | きかい運動の授業に          | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| c | 陸上(リレー、ハードルなど)の授業に | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| d | 水泳の授業に             | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| e | ボールをもちいたゲームの授業に    | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| f | 表現の授業に             | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| g | 体育で使うしせつや用くに       | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| h | 先生のおしえ方に           | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| i | 体育の授業時間(45分)の長さに   | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| j | 体育でからだを動かす量に       | 1. 満足している | 2. 満足していない |          |
| k | 体育の授業時間(45分)の長さは   | 1. 長すぎる   | 2. ちょうどよい  | 3. 短かすぎる |
| l | 体育でからだを動かす量は       | 1. 多すぎる   | 2. ちょうどよい  | 3. 少なすぎる |

長い時間ご協力くださいますとほんとうにありがとうございました。